

立山曼荼羅の絵解き再考

—芦峯寺宝泉坊衆徒泰音の「知」と御絵伝（立山曼荼羅）招請に着眼して—

福江 充

はじめに

近年筆者は、芦峯寺宝泉坊の古文書史料を分析し、江戸時代後期、同坊衆徒の布教活動によって、立山信仰は商人や職人、下級武士らの庶民層にだけでなく、江戸城の関係者など近世身分制社会の最上層の人々にも受け入れられていたことを指摘している。

宝泉坊とかかわりが見られるのは、江戸幕府第11代将軍徳川家斉の夫人の広大院に仕えた御年寄の大奥女中らをはじめ、江戸幕府第12代将軍徳川家慶に仕えた上臈御年寄の山野井、さらに幕末期には、江戸幕府第13代将軍徳川家定の夫人の天璋院篤姫や側室の豊儉院、江戸幕府第14代将軍徳川家茂の

夫人の皇女和宮、彼女たちに仕えた大奥女中らである。この他、幕政を担う松平乗全のような老中や徳川御三家、安芸広島藩浅野家、加賀金沢藩前田家らの諸大名家、さらには徳川家菩提寺の伝通院とのかかわりも見られる。

さて本稿は、江戸の檀那場でこうした幅広い階層の人々に立山信仰を広めることができていた、宝泉坊衆徒の「知」について、衆徒が行っていた立山曼荼羅を用いての勸進活動の実態や、宝泉坊の蔵書などから、若干の考察を試みるものである。

1. 立山曼荼羅の絵解きに関するイメージの形成過程

立山曼荼羅の研究史¹⁾を検討すると、それに描かれた図像・構図・題材となる物語などについては、先学諸氏による多くの研究成果が見られる。だが、それらのなかで示された立山曼荼羅の絵解き布教のイメージや絵解き内容は著しく固定的といえよう。

すなわちそれを具体的に説明すると、立山曼荼羅には「立山開山縁起」、「立山地獄」、「立山浄土」、「立山禪定登山案内」、「芦峯寺布橋灌頂会」に関する図像が描き込まれており（作品によっては「芦峯寺布橋灌頂会」の図像がない場合もある）、立山衆徒が立山曼荼羅を絵解きするとき、これらを話題として語ったとする、きわめて固定的かつ平板的なイメージである。

その源泉を辿ると、立山曼荼羅に関する論文としては戦後初となる沼賢亮氏の「立山信仰と立山曼荼

羅」（『仏教芸術 第68号』仏教芸術学会編、1968年）のなかで、すでに沼氏によって立山曼荼羅がその内容に「立山の開山縁起」、「布橋大灌頂法要」、「立山地獄」、「(立山)浄土」の図を持つことが指摘されている。

さらに、芦峯寺大仙坊の佐伯幸長氏の立山曼荼羅の絵解き布教に関する言説が、のちの研究者に活用され、1970年代前半から先述のイメージが次第に普及していったと思われる。

佐伯氏の著書『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、1973年）は、芦峯寺雄山神社の宮司としての立場で記されており、芦峯寺の伝承記録書といった性格が強い。佐伯氏は宿坊家の出身であったが、檀那場での廻檀配札活動の経験はなかった。だがこの著書には、佐伯氏本人が、愛知県の檀那場で衆徒

として活動した父や祖父、あるいは村内の他の宿坊家の人々から伝え聞かされたと思われる廻檀配札活動の内容や、自坊での配札に対する諸準備についての聞き覚え、経験談などが記されている。そして、立山曼荼羅の絵解きについては次のように記している。

「布教地の町や村に着くと先祖以来の一定の信者宿があり、そこで『立山様』がこられたと布達されて当夜集まってきた人々に四幅対の立山曼荼羅絵を床に掲げて、立山開山縁起と地獄極楽勸善懲惡の法話、それに中宮寺姥堂の女人救済彼岸往生の一条を物語り、立山之尊さと怖しさを語って夏季の立山登山を勧説する。ことに『生きて地獄極楽を此の眼で見、弥陀如来、勢至菩薩、観音菩薩三尊の御来迎を拝み得るは天が下には、わが越中立山あるのみ』と強調する。そして山麓芦峯寺の秋の彼岸中日の布橋灌頂会の縁起を詳述して『女人の罪障消滅し即身即仏、極楽往生の唯一不二の大事なり』と説く。立山の神札、火の札、牛馬の守札、養蚕の守札、牛王札、雷鳥札その他を全戸に配札する。そして死者に着せる経衣を宿に予托して、翌日次の町村へ出立するのである。」

芦峯寺旧宿坊家の神主が語る上記の内容が、のちの研究者のあいだで、立山曼荼羅の絵解きを語るときの基本的な内容として、大きな影響を与えていたと思われる。

その後、1970年代後半には、国文学者の林雅彦氏が立山曼荼羅を体系的に調査し、その過程で岩峯寺宿坊家の延命院から『立山手引草』（嘉永7年3月〔写本〕、岩峯寺延命院玄清書写、岩峯寺延命院文書）と題する立山曼荼羅の絵解き台本と思しき写本2冊を発見した。これが立山信仰史研究の分野においてエボックメーカーとなったことは間違いない。

当時、立山曼荼羅を絵解き研究の観点で考察しようとする動向はすでにみられたが、その際、現存する絵解きを口承文芸として調査・研究することに力が注がれ、立山曼荼羅とかかわるような古文書史料

を調査・検討しようとする試みはほとんどなかった。そこに、絵解き研究史上も画期的なこの発見がなされ、立山曼荼羅を絵解き台本を通して分析することが可能となり、国文学からの研究手法が確立された。また、当時はまだ芦峯寺雄山神社宮司の佐伯幸長氏や富山市・円隆寺住職（芦峯寺泉蔵坊）の佐伯秀胤氏³¹、魚津市・大徳寺住職の佐伯スズエ氏らが立山曼荼羅の絵解きを継承・実演しており、こうした状況も国文学の研究手法で立山曼荼羅の研究を進めていこうとする研究者たちへの、後押しとなっていたようである。

1980年代に入ると林氏は、それまでの立山曼荼羅諸本及びその絵解き台本『立山手引草』についての一連の論文³²を集約した『増補日本の絵解き—資料と研究』（三弥井書店、1984年）を刊行したが、それには詳細な立山信仰関係文献目録が収録されるなど、この時期までの研究史の整理と、伝来する立山曼荼羅のデータ整理が綿密に行われており、これによって立山曼荼羅研究の基盤が確立したといえる。

林氏は同書のなかで、先学研究者の説も踏まえたうえで、4幅1対の立山曼荼羅の絵解き内容は概ね、(A)「立山開山縁起」、(B)「立山地獄」、(C)「立山浄土」、(D)「芦峯寺布橋大灌頂」、(E)「立山禅定案内」の5つから成り立つと指摘され、また、『立山手引草』の内容も、上記の(A)(B)(C)(E)で成立していることを指摘されている。

こうした状況のもと、1980年代には林氏の研究に触発されたかのように、廣瀬誠「立山曼荼羅の概説」（1982年）、同「絵解きへのアプローチ—立山曼荼羅」（1982年）、佐伯立光「立山曼荼羅図に見られる立山信仰の世界」（1984年）、佐伯幸長『立山信仰講話』（1984年）など、立山曼荼羅の絵解きに関する論文が刊行されている。

1990年代には、林雅彦氏が『立山手引草』を活用して立山曼荼羅の絵解きシナリオを作成し、富山県[立山博物館]主催のイベントで、立山曼荼羅の

絵解きを実演した¹⁾。

2000年以降は林雅彦氏によって、立山曼荼羅の絵解き口演の台本が刊行され²⁾、また富山県〔立山博物館〕館長の米原寛氏もDVD版・VHS版「米原寛の絵解き 立山曼荼羅（口演：米原寛、監修：林雅

彦）」(2008年)を刊行した³⁾。

2005年には筆者も、立山曼荼羅の内容を先述のAからEの区分を活用して解説した、『立山曼荼羅絵解きと信仰の世界』(2005年)を刊行している。

2. 『立山手引草』の制作環境と立山曼荼羅

林雅彦氏は、岩嶺寺延命院所蔵の『立山手引草』(写本2冊)が立山曼荼羅の絵解き台本と思しき史料であることを指摘された。この第2冊の奥書に、「于時嘉永七寅年三月下旬写之、主延命院玄清書之、常什物」と記されているので、延命院玄清が幕末に既存の文章(形態は不明)を書写して制作したことがわかる。

制作者の玄清は、いったい何の目的でこれを書写したのだろうか。誰かが立山曼荼羅を絵解きする際、この冊本がテキストとして用いられることもあったのだろうか。あるいは、実際に誰かが行った立山曼荼羅の絵解きを記録したものなのだろうか。そのオリジナルは誰が制作し、所持及び活用していたものであろうか。このように『立山手引草』に関するいくつもの疑問がわいてくる。

芦峯寺の宿坊家には伝来例がない立山曼荼羅の絵解き台本が、岩嶺寺の宿坊家で発見されているにもかかわらず、岩嶺寺一山及び宿坊家の衆徒と立山曼荼羅の関係についてはほとんどわかっていない。そもそも岩嶺寺宿坊家に現存する江戸時代の立山曼荼羅は玉林坊の作品1点だけであり、『立山手引草』を所蔵する延命院にも伝来していない。

文政期頃から一部の岩嶺寺宿坊家の衆徒たちが、加賀藩領国外の芦峯寺宿坊家の既存の檀那場を侵犯し、そこで出開帳やそれから派生した廻檀配札活動を行うようになった⁴⁾。具体的には、文政2年(1819)に中道坊・玉蔵坊・六角坊が越後国で、文政5年(1822)に明星坊・円林坊が美濃国で、文政6年(1823)に玉蔵坊が美濃国で、同年(1823)に明星

坊・円林坊が尾張国で、文政7年(1824)に多賀坊・六角坊が越前国で、天保2年(1831)から惣持坊・般若院が信濃国で、勸進活動を行っている。なおこの頃、意外なことに延命院にはこうした活動は認められず、同坊が立山曼荼羅や『立山手引草』を保持する必然性は、岩嶺寺の先述の宿坊家ほど、なかったように思われる。先述の岩嶺寺衆徒たちはこうした加賀藩領国外での勸進活動を行うにあたって、芦峯寺衆徒のように立山曼荼羅を持つようになり、それを絵解きしていたことがわかっている。これらの宿坊家は、檀那場では旧来よりなじみの深い芦峯寺的な勸進活動に対する需要があり、それに対応するため意識的に芦峯寺の立山曼荼羅に類似した作品も制作し絵解きしていたようである。特に中道坊については越前国で配札を行い、立山曼荼羅を用いて布教活動を行っていたことが確認できる。その際、立山曼荼羅を早急に調達する必要があり、岩嶺寺衆徒が、芦峯寺宿坊家が保持する立山曼荼羅の絵柄を模倣したり、ときには盗んでいったこともあったという。

こうした芦峯寺一山と岩嶺寺一山のあいだで生じた立山信仰の宗教権利、そのなかでも特に廻檀配札活動にかかわる争論に対して、天保4年(1833)、加賀藩公事場奉行で両嶺寺衆徒が呼び出されて直接対決をするところとなり、最終的には芦峯寺側が勝訴した。

ところで、加賀藩公事場奉行での詮議の際、藩当局は芦峯寺・岩嶺寺双方の関係者を呼び出し、岩嶺寺側に対して藩領国外での勸進活動の件について尋問したが、岩嶺寺側は当初その事実を認めなかった。

しかし、芦峯寺側が事前に収集した証拠を藩当局から示され、岩嶺寺側は窮地に陥り、藩の叱責を受けながら、他国での出開帳の開催や立山曼荼羅の使用の事実などをしぶしぶ認めている。このように詮議の際、岩嶺寺側が藩に対して自寺の勧進活動の正当性を一言も弁明せず、むしろ隠し通そうとしたのも、それに対する違法性を本人たちが最もよく認識していたからに他ならない。

さて、玄清が『立山手引草』を制作した嘉永7年(1854)の頃は、岩嶺寺一山が、芦峯寺一山との立山信仰の宗教権利にかかわる天保4年(1833)の裁判に敗れて、支配藩の加賀藩から、藩領国外の国々での出開帳及び立山曼荼羅の絵解き布教は厳禁され、また藩領国内での出開帳についても、これまでとは異なり、立山山中あるいは岩嶺寺境内地の諸堂舎などのよほど大がかりな修復事業でもない限り、容易には許可されなくなっていた時期である。

なお、天保4年(1833)に下された判決では岩嶺寺一山の藩領国内での廻檀配札活動については全く言及されていない。それゆえか、岩嶺寺宿坊家の一部は天保4年(1833)以降も、藩領国内で廻檀配札活動を行っていた。具体例として、中道坊には、弘化2年(1845)の廻檀配札活動を基本に嘉永4年(1851)の分までを書き加えた『加州石川郡廻檀牒』が残っており、その内容から同坊が天保4年(1833)の判決以降も、藩領国内石川郡で廻檀配札活動を行っていたことがわかる。ただし、この檀那帳には「弘化四上ル」とか「嘉永二上ル」といった記載が多く見られ、どうやら中道坊の廻檀配札活動は、芦峯寺衆徒が毎年定期に行った伝統的な廻檀配札活動とは異なり、一過的な性格が強いものであったようである。やはり、天保4年(1833)の判決以降、岩嶺寺の各宿坊家は根本的には廻檀配札活動には消極的にならざるをえなかったと考えられる。

このよう出開帳や配札が著しく規制された岩嶺寺宿坊家にとって、嘉永7年(1854)の頃ともなれば、立山曼荼羅は、勧進活動で国外に進出していた文政

期の時ほど、必要なものではなくなっただけであらぬ疑いを受けおそれもあり、芦峯寺一山が加賀藩から岩嶺寺側の勧進活動において違法行為を見つけ次第、注進するように申し渡されていたので、立山曼荼羅は保持することさへ憚られるような代物となっていたのであろう。現在、岩嶺寺宿坊家の立山曼荼羅で江戸時代の成立と思われる作品が、「玉林坊本」の1点しか確認されていない理由もそのあたりにあると考えられる。

玄清は、文政期頃に岩嶺寺衆徒の誰かによって実演された立山曼荼羅の絵解きに関する台本が下書きのようなもの、あるいは外部から入手した芦峯寺衆徒の絵解きに関する何かなど、そうしたもののいずれかを単に書写するだけでなく、内容もある程度整理しながら『立山手引草』を制作したものと思われる。しかし当時の時勢からすると、玄清は『立山手引草』を即、実用と考えていたとは思えず、むしろ絵解きの一事例を後世に伝えるための記録として制作したのではなかろうか。

玄清には『立山手引草』の他に、同本と同じく嘉永6年(1853)の『立山縁起 沙門玄清台院 第三五冊之内』や安政2年(1855)『立山小縁起 一卷 沙門玄清台房 第三 五冊之内』、安政2年(1855)頃の『御絵講談、立山手引草(仮題) 玄清書之』、『立山開帳靈仏略縁起附タリ便演』などの著作が見られ、他の衆徒と比べ旺盛な執筆意欲が認められる。『立山手引草』はそうした玄清の性格から生み出されたものであろう。

さて、以上、『立山手引草』の内容そのものではなく、むしろ制作背景などを考察してみた。先述のとおり、林雅彦氏はこの『立山手引草』の内容を基に立山曼荼羅の絵解きを復元され、さらに近年は米原寛氏が立山曼荼羅の絵解きを実演し、それを収録したDVDソフトも販売されている。筆者も各所で立山曼荼羅に関する講演を行っているが、その際、主催者側の要望から演題に「立山曼荼羅の絵解き」を

称えることも多々ある。ただ筆者の場合、実際にはパワーポイントを使った、いわゆる立山曼荼羅の図像解説や物語解説を淡々に行っているに過ぎない。

ここで問題なのは、現在、立山曼荼羅の絵解きにかかわる人々は、研究者かあるいはその周囲の人々であることが多いため、いずれも立山曼荼羅に描かれた物語の内容を、そこに描かれた図像の説明を通

して、ひとつたりとも余すところなく解説しようとしている点である。それは、私自身にも当てはまっている。しかし、江戸時代の立山曼荼羅の絵解きは、本当にそのような絵画の総合解説的・画一的なものだけだったのだろうか。もう少し絵解き内容に幅があったのではなかろうか。こうした疑問を持ちつつ、さらに論を進めていきたい。

3. 宝泉坊の檀家にみられる身分の多様性と老中松平乗全の立山曼荼羅

幕末期、宝泉坊衆徒の泰音（智憲・佐伯小武・佐伯大武・佐伯左内、46世・1827～1897年・享年70）と興親（佐伯永丸、47世・1849～1920年・享年71）の親子は、毎年農閑期に江戸の檀那場に赴き、3～4ヶ月の滞在期間中に府内の檀家を巡回し、立山信仰を布教した。

江戸は日本の政治や経済の中心地で、世界有数の巨大都市であった。それを反映して、当時宝泉坊が抱えていた檀家たちの地位や身分は実に多様であり、幕閣大名を含む諸大名や江戸詰めの藩士、幕臣、坊主衆、商人、職人、さらには他宗派の宗教者や遊廓新吉原の関係者、老女を含む江戸城大奥の関係者などもみられる。

このような状況のもと、宝泉坊は三河国西尾藩松平（大給）家を檀家としていた。同家は、江戸時代後期に乗完（第12代藩主）・乗寛（第13代藩主）・乗全（第14代藩主）と三人の老中を輩出した幕閣の名門である。このうち乗寛・乗全親子、さらには乗全の弟で第15代藩主の松平乗秩らが立山権現を厚く信仰していたのだが、特に乗全（官職名は和泉守、1794～1870）は際立っており、自筆の作品を含む何点もの絵画や石燈籠、鉦などを宝泉坊に寄進している。乗全は第14代西尾藩主で、天保11年（1840）に家督を相続したのち、幕府の役職である奏者番や寺社奉行、大坂城代などを歴任した。さらに弘化2年（1845）から安政2年（1855）までと、安政5年（1858）から万延元年（1860）までの二度にわたって

老中職を勤め、幕政の実力者として活躍した。特に二度目の老中職在任中には、大老井伊直弼とともに安政の大獄を遂行したことで有名である。一方、乗全は文武に優れ、書画・詩歌・茶道・蘭語・弓馬・剣術などを得意とした。また、学問所や医学研究所の済生館を設立したり、洋式砲術などを早くから導入・実用化するなど、開明的な性格であった。ところで、宝泉坊衆徒の泰音が、江戸での宗教活動について記した幕末期の廻檀日記帳を読むと、その実態がかなり具体的に見えてくる。それによると、西尾藩の藩邸は茅場町に上屋敷（現、東京証券取引所の場所）、木挽町に中屋敷（現、歌舞伎座の場所）、深川に下屋敷があった。そして泰音がこれらの藩邸を布教に訪れた際には、乗全や乗秩本人らが必ず面談してくれている。彼らの関係は身分を越えて不思議なほどに親密だった。また、藩主の乗全や乗秩が宝泉坊の檀家なので、屋敷に住む家族や愛妾、家臣、女中にいたる全ての者が宝泉坊の檀家となっている。だから泰音は、藩邸ではいつも厚遇を受けている。

こうした宝泉坊との師檀関係から、乗全は安政5年（1858）、おそらく当時宝泉坊が所持していた既存の立山曼荼羅を参考に、自らがプロ顔負けの技法でそれを模写し、新たな立山曼荼羅すなわち本作品の「宝泉坊本」を制作した。その際、表装については、江戸幕府第13代将軍徳川家定に事前に申し伝えたうえで、かつて乗全が将軍世子の徳川慶福（のちの

江戸幕府第14代将軍徳川家茂)から拝領して保持していた衣服を解体し、その布を表具に使用したという。完成した立山曼荼羅は安政5年(1858)12月15日に宝泉坊に寄付された。その後の文久元年(1861)には、この曼荼羅が江戸城本丸や二の丸、徳川御三家のうちの尾張藩邸、紀州藩邸、そのほか加賀藩邸などに順々に貸し出され(江戸城本丸と二の丸は4月21日～5月6日、尾張藩邸と紀州藩邸は

5月9日～5月20日、加賀藩邸は5月25日・5月26日)、江戸幕府第14代将軍徳川家茂や天璋院篤姫をはじめ、諸大名たちのあいだで礼拝・鑑賞されている。また、そうした華麗な経歴をもつ曼荼羅なので、芦峯寺一山は、慶応3年(1867)、加賀藩寺社奉行に対して、当時の加賀第14代藩主前田慶寧にも礼拝・鑑賞していただきたいと願っている。

4. 宝泉坊衆徒泰音の御絵伝(立山曼荼羅)招請

4-1. 宝泉坊衆徒泰音の廻檀日記帳

立山曼荼羅を用いての勸進活動について検討する際、唯一現存する立山曼荼羅の絵解き台本と思しき『立山手引草』は、最も有効な古文書史料であることに間違いない。しかし、それだけで全てを語ることは困難である。

例えば先述したが、立山曼荼羅には「立山開山縁起」、「立山地獄」、「立山浄土」、「立山禅定登山案内」、「芦峯寺布橋灌頂会」に関する図像が描き込まれており、立山衆徒が立山曼荼羅を絵解きするとき、これらを話題として語ったとする、きわめて固定的かつ平板的なイメージは、実際にどこまで本当だったのか、あるいはどういったところが違っているのだろうか。

こうした疑問に対し、筆者は、衆徒の廻檀日記帳が何らかの有益な情報をもたらしてくれるのではないかと考えた。なぜなら、そのなかに立山曼荼羅の活用現場に関する記載が多数見られるからである。『立山手引草』が、衆徒の勸進活動で実際に活用されていたものなのか否か、あるいは文学作品としてや、過去のある衆徒の実演記録として残されたものの、ほとんど活用されることはなかったものなのか、その判断はきわめて難しいが、だからこそ、『立山手引草』の史料的限界を補うために廻檀日記帳の分析は必要不可欠である。

芦峯寺旧宝泉坊には、同坊の衆徒泰音が江戸(1

冊だけ明治期の能登)の檀那場での勸進布教活動について記録した「廻檀日記帳」が多数残っている。そこでそれらを題材として、まず、そのなかから泰音が立山曼荼羅を使用して行った勸進活動に関わる部分を全て抽出し、データベース表を作成した(第1表)。以下、それらの内容を多面的に分析していきたい。

その際、分析対象とした「廻檀日記帳」は次のとおりである。安政2年(1855)『奉納帳 越中国立山宝泉精舎』(個人所蔵)、安政5年(1858)『受納記 越中国立山宝泉精舎』(個人所蔵)、安政6年(1859)『配札日記帳 越中州立山宝泉精舎控』(個人所蔵)、文久元年(1861)『檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控』(個人所蔵)、文久3年(1863)『檀那廻日記 越中国立山宝泉精舎控』(個人所蔵)、元治2年(1864)『檀那廻勤帳 越中国立山宝泉精舎控』(芦峯寺雄山神社所蔵)、慶応3年(1867)『檀波羅密 越中国立山宝泉坊控』(芦峯寺雄山神社所蔵)、明治元年(1868)『檀那廻日記』(芦峯寺雄山神社所蔵)、明治元年(1868)『檀那廻日記』(芦峯寺雄山神社所蔵)、明治26年(1893)『立山講社巡廻簿 能登国』(芦峯寺雄山神社所蔵)。

4-2. 立山曼荼羅を使用した勸進活動の実施回数

廻檀日記帳ごとに、廻檀期間と期間中に実施した立山曼荼羅を活用した勸進活動の回数を調べたが、

その実態は次のとおりである。

●安政2年(1855)の廻檀日記帳

安政2年12月2日出立、安政3年5月8日帰着。17回(安政3年2月12日～同年4月2日)。

●安政5年(1858)の廻檀日記帳

安政5年11月25日出立、安政6年6月13日帰着。41回。ただしそのうち11回は当初予定されていたもの実際には行われておらず、したがって30回(安政5年12月7日～同6年5月16日)。

●安政6年(1859)の廻檀日記帳

安政7年3月28日出立、6月13日帰着。30回。ただしそのうち5回は当初予定されていたもの実際には行われておらず、したがって25回(安政7年閏3月27日～同7年5月22日)。

●文久元年(1861)の廻檀日記帳

正月13日出立、帰着日の記載は見られない。33回。ただしそのうち4回は、宝泉坊衆徒泰音が檀家に依頼し、No.04-24広島藩桜田屋敷、No.04-27江戸城本丸・二の丸、No.04-32尾張藩市ヶ谷屋敷・和歌山藩赤坂屋敷、No.04-33加賀藩本郷屋敷に立山曼荼羅が持ち込まれたもので、泰音自身が行ったわけではない。したがって29回(文久元年正月26日～文久元年5月26日)。

●文久3年(1863)の廻檀日記帳

2月6日出立、8月17日帰着。38回(文久3年3月5日～同3年5月38日)。

●元治2年(1864)の廻檀日記帳

元治2年正月22日出立、7月29日帰着。48回(元治2年2月1日～同2年7月28日)。

●慶応3年(1867)の廻檀日記帳

慶応3年3月12日出立、8月20日帰着。41回(慶応3年4月24日～同3年7月25日)。

●明治元年(1868)の廻檀日記帳A

明治2年(1869)1月22日出立、6月5日帰着。10回(明治元年正月23日～同年5月24日)。

●明治元年(1868)の廻檀日記帳B

明治2年(1869)1月22日出立、6月5日帰着。10回

(明治元年2月4日～同年5月23日)。ただし明治元年(1868)の廻檀日記帳Aの内容と4件の重複あり。

以上の内容を見ていくと、宝泉坊が三河国西尾藩主の松平乗全から立山曼荼羅を寄進された安政5年(1858)頃から回数が増加し、さらに江戸城や諸大名家で宝泉坊の立山曼荼羅が回覧された文久元年(1861)以降も著しく増加している。その後、明治に入ると回数は激減している。

この状況は、先述したように、宝泉坊が当時江戸幕府老中であった松平乗全から拝領し、さらに江戸城や諸大名家でも回覧された特殊な経歴の立山曼荼羅を、廻檀の際に格別な寺宝として積極的に喧伝・活用していたことの表れであろう。

4-3. 立山曼荼羅を示す呼称

宝泉坊衆徒の泰音が立山曼荼羅に対して用いていた呼称を調べたが、その実態は次のとおりである。

No.01-01他「御曼荼羅」、No.04-24「御曼荼羅様」、No.06-01「曼荼羅」、No.01-06他「御絵伝」、No.09-01他「御絵伝様」、No.02-17他「絵伝」、No.01-02他「立山御絵図」、No.01-13他「御絵図」、No.09-04他「御絵図様」、No.06-48「立山様」などの呼称が見られる。

全269件中、「絵伝」が48件で最も多く、次いでわずかの差で「絵図」が46件、「曼荼羅」が13件となっている。泰音にとって立山曼荼羅は立山開山佐伯有頼(慈興上人)の行状を描いた「絵伝」や「絵図」であったのだろう。その反面、地獄・極楽図としての意識はやや希薄なような気がする。

4-4. 立山曼荼羅を使用した勸進活動を示す呼称

泰音が、檀家での立山曼荼羅を使用した勸進活動に対して用いていた呼称を調べたが、その実態は次のとおりである。

No.01-06他「御絵伝請待」、No.01-07他「御絵伝弘通」、No.01-12「御絵伝掛に参り」、No.01-13他「御絵伝招請」、No.02-16他「御絵図弘通」、No.02-17「絵伝弘通」、No.02-36「御曼荼羅招請」、No.03-01

他「御絵伝礼拝」松平乗全の屋敷、No.05-04他「御絵図招請」、No.02-23他「招請」、No.06-48「立山様御懸じ(懸事)」などの呼称が見られる⁹⁾。

「招請」が105件、「請待」¹⁰⁾が6件、「弘通」が28件見られ、泰音については、檀家での立山曼荼羅を使用した勸進活動に対しては、「招請」や「弘通」と呼称することが多かった。

4—5. 立山曼荼羅を使用した勸進活動の儀式内容

泰音が檀家で立山曼荼羅を使用してどのような儀式を行っていたのかを調べたが、その実態は次のとおりである。

No.02-14「石井徳左衛門殿御絵伝ニ参り。中食頂弘通之事。夫より仏前勤候。又夫より御絵前において諸家(1字欠損)茶廻向仕候事。是より夕飯戴。」

No.02-21「本所即源寺へ御絵伝請待ニ参り。中飯戴、寺仏前念仏(以下欠損)夫より絵伝三拜、次二経、次念仏唱(以下欠損)、懺悔戒授、次十念授、夫より自由也。」

No.02-30「昼後より寺嶋円蔵殿招請ニ付参り。御絵伝前附いたし。夫より廻向仕候事。」

No.02-31「浄土宗西岸寺江招請ニ付参り。(中略)夫より本堂、寺嶋氏等世話二而絵伝掛候事。夫より少々勤、念仏唱、演説は東上玉沙汰王咄、彫刻釈迦如来之咄、其外色々御咄仕候。」

No.02-36「深川中御屋敷内沢田徳兵衛様へ御曼荼羅招請ニ付参り。仏前廻向仕。夫より弘通常之通り。」

No.03-05「深川若殿様御奥様へ御目見。夫より御物見三州御領分庄屋方参り候ニ付、御絵伝弘通いたし、家中共参詣いたし。」

No.03-08「渡辺円斎様霊照院不味妙鏡大姉法事建夜ニ付、御絵図并涅槃像懸ヶ御親類方へ参詣ニ付、演説いたし。」

No.03-18「三浦志摩守御内石井徳左殿招請ニ付参り。戒名一々読上候。」

No.03-20「沐浴、白衣二而、約諾之通り大隅守様へ上ル。御絵図招請ニ付、尤涅槃像仕り上り、御加持

申上候事。」

No.03-26「伊勢町富田屋彦四郎殿招請ニ付参り。泊り。其夜、念仏。」

No.03-28「沐浴いたし、白衣改、松平和泉守様へ参殿仕、御絵図招請ニ付参り。」

No.04-06「仏母庵招請尔付参り。霊明師廻向仕、夫より曼荼羅前ニ□(1字欠損)仏回向、懺悔戒、夫より十念授与、夫より演説いたし。」

No.04-11「高砂屋平吉方へ招請尔付参り御絵図掛ル。廻向仕候。」

No.04-17「愛宕下大沢肥前守様招請尔付参り。神前霊前廻向、次ニ弘通いたし。」

No.05-16「三河屋文七殿へ招請尔付参り泊り。一日法談御座候事。」

No.08-10「御住居様御暇者登り、神前仏前拜、御曼陀羅掛夫々様拜被遊候事。仏法僧たとひ御断申上候事。(中略)六根返之御咄し申上候事。」

以上の内容から、檀家での泰音の法要のあり方として、まず第一に、仏間かあるいは神棚がある部屋に立山曼荼羅を掛けて、仏前(霊前)あるいは神前で廻向¹¹⁾及び戒名の読み上げを行うことが一般的なかたちであった。茶牌廻向を行っている事例も見られる。その後、立山曼荼羅が弘通された。さらに、その場に応じて念仏や加持¹²⁾、読経¹³⁾、立山曼荼羅の礼拝、懺悔戒の授与、十念の授与¹⁴⁾などが行われた。法要の最後に演説・説法が行われている。なお、松平和泉守ら大名屋敷などを訪れる際には事前に沐浴し¹⁵⁾、白装束に着替えて出かけている。

ところで、問題はこの「弘通」の用語が指し示す具体的な内容であるが、それが狭義の意味で立山曼荼羅を使用した絵解きそのものを指し示しているのか、それとも広義の意味で、仏前廻向を済ませたのちの、念仏、読経、加持、さらには演説・説法なども全て含んだ法要を指し示しているのかは、なかなか判別が付き難いところである。筆者はおそらく「弘通」の用語は両方の意味を持っており、その場に応じて使い分けられていたと考えている。例えば新

規の檀家（例えばNo.04-08の三河屋長三郎）の求めに応じ、あるいは、どうしてもおきまりの立山開山縁起の話題を聞きたいといった信徒には、立山曼荼羅に描かれた図像の内容を直接的に語る場合もあったらうし、毎年の廻壇でその内容はすでに知っている信徒に対しては、立山曼荼羅は礼拝画として機能しており、むしろ、「弘通」を法要全体を指すものとしてとらえ、そのうちの説法・演説がその主要部であったと考えることもできよう。なお、立山曼荼羅が、儀式を行うための空間を現出させる機能や礼拝画としての機能を持っていたことは前掲のNo.02-21「絵伝三拝」やNo.08-10「御曼陀羅掛夫々様拝被遊候事」などの記述からわかる。もっとも、宝泉坊の立山曼荼羅は先述のとおり、三河国西尾藩主で江戸幕府老中の松平乗全が描いた作品で、その表装には徳川将軍のお召し衣も使用されているので、他の作品以上に礼拝画としての価値を持っていたから、泰音にとって、この曼荼羅ならではの活用の仕方と、儀式の進め方があったかもしれないことは考慮しておく必要があろう。

泰音が勤めを行う前かあるいは終えてから、昼食として御齋が出されている事例が見られる。その状況は次のとおりである。No.01-06・08・13昼食、No.02-01夕食、No.02-14・36昼食・夕食、No.02-17・21昼食、No.04-10昼食、No.09-07・08昼食。

4-6. 特別な法事の際にも行われた招請

檀家での特別な法事の際にも、立山曼荼羅を使用して儀式が行われている。以下、そうした事例を2件あげておく。

No.01-14「廻町永井奥之助様御内寿信院へ参り。御絵図相掛ケ并説法ノ後ニ放生会ニうなぎはなし、右作法ハ三礼⁹¹、次ニ阿弥陀経、次ニ瓶ノ水中さ水を加持メ入ベシ。」
No.03-08「渡辺円齋様靈照院不味妙鏡大姉法事逮夜ニ付、御絵図并涅槃像懸ケ御親類方へ参詣ニ付、演説いたし。」

No.01-14では、檀家の廻町・永井奥之助宅で立山曼荼羅を掛け、説法を行ったのちに放生会を勤めている。放生会は仏教の不殺生の思想に基づいて、捕らえられた生類を山野や池沼に放ちやる儀式である。通常、神社・仏寺では陰暦8月15日に行われることが多い。永井宅では、うなぎを放している。なお、宝泉坊の蔵書のなかに、放生会にかかわるものとして、『放生手引草』（天明3年）や『放生報応集』（第2表No.072、文化3年）が見られる。檀家での儀式の執行にあたっては、事前にこうした書籍の内容を参考にしていただけた可能性もある。

No.03-08では、檀家の渡辺円齋宅で法事のお逮夜を勤めた際に立山曼荼羅と涅槃図を掛け、参集した親類方に演説を行っている。

4-7. 話題

立山曼荼羅が掛けられた「場」では、No.01-07「弘通」やNo.01-14「説法」、No.03-31「演説」が行われたが、そのときには次のような内容が語られていた。

「咄ハ篤□□(2字難読)如来」(No.02-07)、「咄し国寺咄、并二十七番咄シ」(No.02-09)、「演説は東上玉沙汰王咄、彫刻釈迦如来之咄、其他色々御咄仕候。」(No.02-31)、「大貪王長寿王咄しいたし。」(No.04-07)、「一ノ谷七番咄し」(No.04-14)（立山曼荼羅にこれに関する図柄がある）、「説法阿弥陀経并周菊童子事」(No.04-13)、「一念發起菩提心咄し」(No.05-20)、「称名川咄し。歎ヲ以思報すれば徳ニ沈之咄し」(No.05-33)、「小町咄し、修羅道咄し等」(No.05-36)（立山曼荼羅に修羅道の図柄がある）、「称名川咄等」(No.05-37)（立山曼荼羅にこれに関する図柄がある）、「布橋供養咄し」(No.06-15)（立山曼荼羅にこれに関する図柄がある）、「曾我咄し」(No.06-18)、「三界靈覺女咄し」(No.06-34)、「三界靈之御咄し」(No.06-35)、「母山姥之咄し」(No.06-40)（立山曼荼羅にこれに関する図柄〔芦峠寺の媽尊〕がある）、「大どん(貪)王咄し」(No.06-44)、「称名川咄し」

(No.06-47) (立山曼荼羅にこれに関する図柄がある)、「菩提六根咄し」(No.07-01)、「十雪并慈童咄し」(No.07-03)、「慈童之咄致、三度栗咄しいたし。」(No.07-03)、「地蔵尊之御咄し」(No.07-22) (立山曼荼羅にこれに関する図柄がある)、「種々御咄し」(No.07-23)、「七番咄」(No.08-03) (七番は一ノ谷の話。立山曼荼羅にこれに関する図柄がある)、「地蔵尊咄し」(No.08-03) (立山曼荼羅にこれに関する図柄がある)、「仏法僧たとひ御嘶」「六根返之御咄し」(No.08-10)、「八番長谷川観音ばなし」(No.10-01)

以上の事例から、立山曼荼羅が掛けられた「場」で、立山曼荼羅の画像の一部やそこに込められている思想の一部に関わるテーマで「弘通」・「説法」・「演説」が行われていたことがわかる。ただしその際、泰音が立山曼荼羅の画面から、関連の画像を実際に指し示したりしていたかどうかは判断できない。立山曼荼羅が掛けられることで、儀式のための空間が現出することが重要であり、その際の説法は、立山曼荼羅の画像内容と切り離されて行われていた可能性もある。

また、立山曼荼羅が絵解きされるとき、それに描かれた画像の内容だけがいつも同じように語られていたわけではなく、その時々、立山曼荼羅には画像がなくても、ある特定のテーマを決めて語られることも多々あったことがわかる。

さて、話題のなかに「一ノ谷七番咄し」や「八番長谷川観音ばなし」、「二十七番咄し」など、番数が示されているものもある。少なくとも27番までは話題があったということである。なお、「八番長谷川観音ばなし」については、宝泉坊の蔵書のなかに文政5年(1822)開版の『大和国長谷寺縁起(豊山長谷寺略縁起)』が見られるので、この縁起と関係した内容を話していたとも考えられる。

「一ノ谷七番咄し」(No.04-14)、「小町咄し、修羅道咄し等」(No.05-36)「布橋供養咄し」(No.06-15)、「母山姥之咄し」(No.06-40)、「称名川咄し」(No.06-

47)、「地蔵尊之御咄し」(No.07-22)などの話題は、立山曼荼羅の画面に関連の画像が含まれており、それを指し示しながら語っていたとも考えられる。

なお、「地蔵尊之御咄し」については、一般的には立山信仰に直接かかわる地蔵尊の話題が語られていたと考えるのが妥当であろうが、一方では宝泉坊の蔵書のなかに『地蔵菩薩靈驗記 卷第一・卷第二』や『地蔵菩薩應驗新記』などの書籍が見られるので、これらの内容も参考にされ、ときには語りに盛り込まれることもあったのであろう。

4-8. 布施・血印・散銭

泰音の廻檀日記帳から御絵伝招請に関する部分を抽出していくと、泰音の勤めに対して檀家が寄進したお布施が記されている場合が多い。その際、布施料や初穂料、廻向料、散銭、血印、血盆経等の項目で金額が示されている。特に御絵伝招請が行われたときには、血印が多く頒布されている。その具体的な状況は第1表の「内容」の項目に示しているが、さらにそのなかから立山曼荼羅を掛けて行う儀式に対する散銭(賽銭)と血印に関する代金を抽出してみた。

以下、散銭の金額の状況を示しておきたい(単位:文)。

【100文以下(単位は「文」)】

32・36・60・72・84・92・100

【200文以下(単位は「文」)】

105・112・120・124・142・160・164・168・180・187・200

【300文以下(単位は「文」)】

210・212・216・232・234・250・272

【400文以下(単位は「文」)】

331・334・350・356・365・365・376・381・384・400

【500文以下(単位は「文」)】

450・464・500

【500文以上(単位は「文」)】

500・508・520・560・604・652・904・914・950・1
朱100文・3朱。

以上の内容から、散銭は500文以下（100文～400文）が多い。

一方、血印料は一人概ね136文で、複数人の場合は136文から137文の倍数であることが多い。

4—9. 世話人

宝泉坊の江戸の檀那場では、師檀関係の新たな勧誘など、世話人として同坊の廻檀配札活動を支援する檀家が存在している。小石川西富坂上御掃除組屋敷の寺嶋円蔵と芝口1丁目の平柴屋幸七（炭店）、深川の哥川喜代松、深川北六間堀下ノ橋の沢田屋仁兵衛らである。寺嶋氏が仲介した事例はNo.02-29・31、No.03-24、No.04-18、平柴屋が仲介した事例はNo.02-40、哥川氏が仲介した事例はNo.03-22、沢田屋が仲介した事例はNo.04-13である。

5. 宝泉坊の蔵書目録に見る衆徒泰音の教養

5—1. 泰音に対するパーシヴァル・ローウエルの印象

宝泉坊衆徒の泰音は義父から江戸の檀那場を引き継ぎ、その経営に活躍した。地方霊山の一階の御師が、江戸城大奥や諸大名家に立山信仰を広めることに成功したといった点では、強烈なサクセスストーリーの持ち主である。

泰音が書き残した江戸の檀那場での廻檀日記帳を読むと、檀那場経営の成功の秘訣は、やはり彼の手柄や才覚によるところが大きいと思われる。興味深いのは、彼が江戸のいずれの身分階級の檀家たちにも、驚くほど親しく受け入れられていた点である。とりわけ大名屋敷などでは、奥女中たちに懇意にされているのが面白い。

ところで、アメリカ合衆国ボストン出身の天文学者で、冥王星の存在予測やローウエル天文台の建設、火星研究やあるいは日本研究者としても著名なパーシヴァル・ローウエル(1855～1916)は、明治22年(1899)5月13日に芦嶺寺の宝泉坊に宿泊し、そのとき、当時隠居生活を送っていた泰音と直に面談している。

どうやらローウエルは泰音の人間味にいたく惹かれたようで、のちにそのときの泰音の印象を彼の著

書『NOTO』¹⁾のなかで次のように詳しく述べている。

「彼は社交性に富み、西洋人が到着したと聞くと、自分の離れからわざわざ足を運んで、私に会いに来てきた。」

「さて、なかなかの美術骨董品の愛好家である隠居は、玄関にまで出て私を迎え入れ、二階の一室に案内すると、かすかすの自慢の宝物を見せてくれる。部屋は、つづれ織り模様の雅致のあるしつらえで、彼にとってそれがいかにも自慢そうで、家の建て方はシナ風で、主人公の古典趣味がよく生かされている。しかし、それにも増して感心したのは、彼がこの家の周囲の風景を、こよなく愛している点である。さらに、私の心を動かしたのは、彼が立派な茶人であり、茶道と自然との調和こそ、彼のもっとも意とするところであることだ。彼が愛してやまない景色に見とれていると、彼は茶棚から風変わりな形の壺をとり出し、その壺からハチミツをコップにそそぎ、私の前に差し出した。私は押しただいて、この修道士が飲む、香気あふれる飲物をいただく。これは自然の手になる薬液で、隠遁者たちの間では、貴重品として飲まれているものである。その中に、この世に生きながらえる月日は、そう長くはないが、ま

だまだ人間味にあふれている隠居さんとお別れする時がやってきた。」⁸¹⁾

この件からは、わずかな時間でローウェルを惹きつけた泰音の社交性や人間味、そしてその上台となっていたと思われる彼の知性や教養の香りが漂っている。

5-2. 宝泉坊の蔵書目録

宝泉坊衆徒の泰音は、江戸の檀那場で立山曼荼羅などを活用した勸進活動を行い、幅広い階層の人々に立山信仰を広めることができていた。檀家では、立山曼荼羅に描かれた図像の内容のみならず、幅広い話題で説法や演説を行っている。そうした活動を可能とさせていたのは、彼の日頃からの勉学であったと思われる。その泰音が自ら記した宝泉坊の蔵書目録が残っているのも、その内容をもとに泰音の「知」の一端について検討を試みたい。

蔵書目録(写真1)の形態は折紙で、縦12.5cm×横19.0cmである。表紙はない。全18丁で、うち記載されているのは7丁表までである。この帳面に記された内容を整理してデータベース表(第2表)を作成した。

まず、この蔵書目録には全86点の書名が記載されている。具体的な書名などについては第2表を参照していただきたい。目録上の掲載順を示す番号の横にふられた「●」印は、旧宝泉坊の所蔵史料として現存している書籍を示している。また「★」印は、宝泉坊の廻檀日記帳に関連の記載が見られる書籍を示している。

蔵書目録に掲載された書籍の種類を国書総目録の分類で見っていくと、読本、往来物、浮世草子、仮名草子、物語、咄本、寺院、仏教、真言、天台、浄土、真宗、臨済、日蓮、心学、声明、教訓、漢詩、俳諧、歌集、道歌、花道、書道、伝記、実録、戦記、軍記物語、和算、地誌、辞書、手鑑、暦、占卜、年表など実に幅広く、このことから泰音が宗教者として当該分野はもちろん、他の分野に対しても幅広く興味を抱き、自身の教養や学識を高めようとしていたことがうかがわれる。

それでも強いて特徴をあげるならば、やはり衆徒の蔵書であるので宗教関係の書籍が多い。しかも、芦峯寺一山は天台系であるが、同宗派に関する書籍だけでなく、様々な宗派の仏教書を所持している。これも、宝泉坊が檀那場で様々な宗派の人々を檀家としていたからであろう。

旧宝泉坊には、蔵書目録に記された書籍意外にも多くの書籍や経典が残っている。なかには泰音が求めたことが注記されている『両界種字梵字集』(泰音が弘化4年に求めている)や『三千仏名経 他』(泰音が安政2年に求めている)、『阿弥陀経(泰音が安政6年に求めている)』なども含まれている。

さて、旧宝泉坊に残る江戸時代の蔵書については、第2表のNo.006『阿倍仲麻呂入唐記』やNo.010『善光寺如来縁起』、No.020『生花早満奈飛』、No.031『十王讃嘆鈔』、目録外の『両界種字梵字集』などに見られるように、泰音が弘化4年(1847)頃から書籍を入手し始めている。さらに、嘉永期にNo.035～No.047・No.055、安政期にNo.048～No.051・No.056・No.060・No.062・No.067、万延期にNo.069～No.086といった具合に、次第に蓄積されていっている。これは宝泉坊の家の事情と連動している。すなわち、宝泉坊では天保13年(1842)2月29日に当主の照円(泰音の義父)が死去したので、息子の泰音がその跡を継いで、江戸などの各地の檀那場で廻檀配札活動を行わなければならなくなった(泰音は16才から配札を行った)。檀那場で様々な身分の多くの人々と交流するため、宗教的なことはもとより様々な教養や一般常識が必要となったのである。そこで様々な書籍を入手し学習し始めたのである。そうして宝泉坊の蔵書が次第に蓄積されていくこととなった。

5-3. 寿信尼からの書籍の寄進

泰音の安政5年(1858)『受納記』には、安政6年(1859)の4月4日の条に、
〔部分〕

一、金式朱 左官忠七

(4月4日)右為寿信尼菩提被納。外ニ、科註無量寿經巻冊、集前□(1字欠損)本巻冊、徳本上人御説伝巻冊、祐天僧正利益記巻冊、風呂敷巻ツ、錦袋巻ツ。寿信院為菩提ニ被納、寿信与本ニ記事。施主左官忠七申。忠七江上候事。渡辺氏帰り泊り。

と記載が見られ、寿信尼と称する人物から左官忠七をとおして、宝泉坊に『科註無量寿経』、『集前□(1字欠損)本』、『徳本上人御説法』、『祐天僧正利益記』などの書籍が寄進されている。このうち『徳本上人御説法』と『科註無量寿経』は現存している。前書には「安政六未春、大川端松浦大和守様御屋敷寿信法尼命終後ニ知音左官忠七方拙坊江御送り被下。越中州立山宝泉六十二世現住泰音(復飾佐伯左内)誌」と記載が見られ、後書にも『右十冊者安政六己未春、肥前平戸新田城主松浦豊後守様御内寿信院ヨリ為遺物拙僧江御送被下。泰音誌」と記載が見られる。

後書については、宝泉坊の蔵書目録にも書名が記載されており(No.060)、さらに「安政六己未春。右肥前平戸新田城主松浦豊後守様御屋敷内、寿信尼為遺物、拙僧被讀被下。」と注記がなされている。

寿信尼は宝泉坊の檀家で、肥前国平戸藩松浦氏の本所の下屋敷で奉公していた¹⁹⁾。彼女の実家は小舟町1丁目新道の左官忠七家で、宝泉坊の檀家であった²⁰⁾。なお、忠七はそののち人形町杉森庄助屋敷樋荷前に引っ越している。寿信尼は宝泉坊の檀家で、麴町3丁目谷の永井奥之助²¹⁾と同居しており²²⁾、そこから松浦氏の下屋敷に通っていたものと思われる。

宝泉坊の安政2年(1855)『奉納帳』(芦峯寺宝泉坊所蔵)の安政3年(1855)3月23日の条には、「麴町永井奥之助様御内寿信院へ参り。御絵図相掛ケ并説法ノ後ニ放生会ニうなぎはなし、」と記載が見られ、このときまでは寿信尼の生存が確認できる。したがって寿信尼はこれ以降、彼女所蔵の書籍が宝泉坊に寄進された安政6年(1859)までのあいだに死去したものと思われる。

安政6年(1859)の書籍の寄進以後、万延元年(1860)にも、寿信尼の遺物として彼女の書籍が宝泉坊に寄進されている。宝泉坊の蔵書目録に記された書籍のうち、第2表No.069~No.086の書籍である。また、宝泉坊の慶応2年(1866)の檀那帳(芦峯寺雄山神社所蔵)によると、松浦氏の家臣の玉置将曹の仲介で、寿信尼が生前使用していた諸道具類が宝泉坊に寄進されている²³⁾。

5-4. 泰音の書籍購入

宝泉坊の『宿并土産物覚』には、「一、田所町家主利兵衛、大和屋半兵衛殿、貸本店」と記載が見られ、同坊の檀家に貸本店を営む者がいたことがわかる。泰音の文久元年(1861)「檀那廻日記」には「一、三十式文 三国志借代」と記され、泰音が「三国志」を32文で借りていることがわかるが、おそらくこうした貸本屋から書籍を借りることも多々あったのだろう。

また、泰音は廻檀配札活動で江戸の檀那場に滞在中、度々書籍を購入している。

泰音の安政2年(1855)『奉納帳』には、巻末の「小遣覚」の箇所に「(4月15日)式百八十文 絵本巻冊七文ツ、」と記され、絵本1冊を280文で購入していることがわかる。

嘉永6年(1853)『休泊等諸事覚帳 立山宝泉坊精舎』には巻末の「遣用覚」の箇所に「(嘉永6年5月21日) 一、四百八拾四文 幼学討韻等」や「(嘉永6年5月23日) 一、百八文 本巻冊」、「(嘉永6年5月24日) 一、三百七拾五文 経写本巻冊」と記されている。このなかの「幼学討韻」は第2表No.065の『討韻碎金幼学便覧』で、泰音が嘉永6年5月21日に484文で購入していることがわかる。

泰音の安政5年(1858)『受納記』には巻末の「江戸□□□□(4字欠損、「ニ而小遣」か)覚」の箇所に、「(2月20日)一、百十文 王翰化道文集求ル」や「(4月15日)一、六百七十二文 西谷名目 上下」、「(4月21日)一、百文 止観大意」、「(5月12日)一、□(1字欠損)百八文 錦絵」などと記されている。こ

のなかの「王翰化道文集」は第2表No.062の『王翰化道文集』で安政5年2月20日に110文で、「西谷名目上下」は第2表No.057の「大字西谷名目 上下」で同年4月15日に672文で購入している。また「止観大意」は第2表No.067『止観大意講録 全』で同年5月12日に100文で購入していることがわかる。元治2年(1865)「檀那廻勤帳」には、巻末の「江戸ニ而小遣覚」の箇所に「一、金貳(以下判読不能、朱か?)百五十文 法花経 巻部」や「一、百文 新書画價録 巻冊」と記されている。

宝泉坊の蔵書のうち『地藏菩薩靈驗記 卷第一・卷第二』の表紙には280文の貼り紙が見られ、おそらくその値段で同書を購入したのであろう。

5-5. 宝泉坊の蔵書に見られる諸縁起

宝泉坊の蔵書のなかには、多くの諸縁起や物語などが見られる。今、それらを挙げてみると、No.010『善光寺如来縁起』、No.084『九品山略縁起』(文化9年)、『身代観世音略縁起(武州橋樹郡稲毛領細山村 南嶺山 香林禅寺)』(安永3年)、『十三仏功德縁起(越中州立山芦峯寺泰音悪筆写之)』(弘化3年)、『上野国板倉大同山宝福寺縁起(上州館林伊豆山後又号大同山観音院宝福寺縁)』、『善導大師真影略縁起 武州荏原郡鶴木光明寺』、『聖徳皇太子略縁起 三帝勅願所 三州額田郡保母村六名山皇御坊勝鬘皇寺』、『弘法大師略縁起』、『菅神御直作 千手観音縁起 市ヶ谷光徳院(武州豊島郡市谷村七星山光徳院千手観音縁起)』、『厄難除 火防 鉦冠薬師瑠璃光如来略縁起』、『富士山出現興楞地蔵尊略縁起(駿州駿東郡御厨古沢通り上小橋村去来原卓錫山地蔵禅院再販)』、『東山銀閣寺略縁起』、『天拝一光三尊仏(天拝一光三尊仏略縁起)』、『名号根本由来 宝泉坊在庫(第六番尾張国常滑絲引寺正住院)』、『地藏菩薩靈驗記 卷第一・卷第二』、『観音靈驗記 卷三』、No.018『道成寺靈蹤記』、『富士人穴物語り』(文政5年)、No.047『佐世の中山夢物語』No.086『小夜中山霊鐘記』、『永代燈明講勸進帳 浅草燈明

寺』(弘化4年)などである。

これらは、衆徒が廻檀配札活動で多くの人々と交流するために必要とする教養を高めるためのものであったり、あるいは説法や演説を行う際の話題に活用されたり、衆徒自身が縁起や勸進記を作成する際の参考文献として活用されたものと考えられる。

5-6. 芦峯寺実相坊の「話説」

宝泉坊の蔵書のなかには、『越中の国立山大権現の由来并義賢行者の入定之訳』と題する直筆の冊子が見られる。法量は縦24.0cm×横16.5cmで全10丁である。表題の下に「話説 私之独言記候」と記され、さらに巻末に「立山実相坊」の署名が見られるので、この冊子が芦峯寺実相坊によって記されたことがわかる。おそらく実相坊の衆徒が実際に行った法話をまとめたものか、あるいはそれを行う前のシナリオのようなものと考えられる。なお、この冊子が立山曼荼羅の絵解きと直接かかわるものであったかどうかは、これといった決めてがなく、判断がつかない。

実相坊は宝泉坊と同じく江戸を檀那場としており、毎年、廻檀配札活動を行っていた。

この冊子では江戸時代後期、民衆のあいだで熱烈な信仰と人気を集めていた木食聖(念仏行者)義賢のことも触れられており、実際、義賢は天保11年(1840)8月に越中立山で修行しているのだが²¹⁾、それにかかわる記載も見られ、この冊子の成立はそれ以降と考えられる。

大まかに内容を見ていくと、①立山開山縁起、②芦峯寺の嬬尊、③立山禅定登山案内、④立山と義賢とのかかわり、⑤立山地獄などの内容が記されている。

岩峯寺延命院所蔵の『立山手引草』と同様、この冊子の内容も立山信仰に直接かかわるものばかりで、ほとんど脇道にそれることはない。立山衆徒のあいだで法話記録やあるいは立山曼荼羅の絵解き記録が残されるとしたら、こうした立山大縁起や立山略縁起、立山にかかわる古典など、既存の立山がら

みの内容をベースとして作られたお手本的ともいえるようなものが、案外意図的に残されてきたのではなかろうか。もしくはお手本的なものに意図的に整理されたのではなかろうか。

5-7. 泰音の能楽鑑賞

宝泉坊泰音の安政5年(1858)の廻檀日記帳「受納記」に、「五月十五日、和泉(以下数文字欠損)能拜見被仰付候ニ付、昼後(以下数文字欠損)拜見仕候事。御能番附左ニ記置。」と記載が見られ、あわせて「御能并御囃子組」と題して、「嵐山」(脇能物・夢幻能)、「末廣かり」(狂言・脇狂言)、「橋弁慶」(能・四番目物)、「羽衣」(能・三番目物)、「蟹山伏」(狂言・鬼山伏狂言)、「小鍛冶」(夢幻能・五番目物)、「雲雀山」(能・四番目物)戸田左門様、当摩(当麻)の演目と配役などが記されている。さらにこの条の末尾には、「是方千秋楽阿

り。右之通り、暦々様方御故、拜見冥加至極御座候。」と泰音のわずかな感想が記されている。

この能は、三河国西尾藩第14代藩主の松平乗全²⁵⁾が主催したもので、役者たちに交じって乗全自身も「小鍛冶」を、また乗全の嫡男乗秩²⁶⁾が「羽衣」を、乗秩の義父の戸田左門²⁷⁾が「雲雀山」を、乗全の娘婿の松平市正²⁸⁾が同じく「雲雀山」を演じている。泰音は乗全のはからいでこの能を鑑賞させてもらったのである。

能以外に、泰音は芝居も鑑賞している。泰音の元治2年(1865)「檀那廻勤帳」の「江戸ニ而小遣覚」の箇所に「一、五十六文 芝居 根岸」と記載が見られる。

以上、こうした能楽や芝居の鑑賞なども、泰音の教養を高めるうえで大いに役に立っていたと思われる。

おわりに

以上本稿では、芦峯寺宝泉坊の衆徒泰音が記した廻檀日記帳を題材として、そのなかから立山曼茶羅に関する記載を全て抽出・分析し、いわゆる立山曼茶羅の「招請」の実態について検討を試みてきた。そこでわかったことは、檀家で立山曼茶羅を使用して「招請」を行った場合、信徒に対しては、立山曼茶羅に描かれた内容だけでなく、様々な話題で説法や演説が行われていたことである。さらにこのことは、立山曼茶羅の語り手によって、その人の知識や教養などに基づき「招請」の内容(単に絵解き内容だけでなく、儀式の「場」の作り方や儀式内容そのものまで)に多様性が生じていた可能性を示唆するものである。したがって、芦峯寺の一山組織や各宿坊家には、簡略なシナリオともいえる立山略縁起があればそれで事足り、底本となるような立山曼茶羅の固定的な絵解き台本を制作・所持する必要性はそれほどなかったであろう。これまで芦峯寺宿坊家には立山曼

茶羅の絵解き台本は1点も見つかっていない。

さて、従来の『立山手引草』を題材とした研究では、立山曼茶羅が、(A)「立山開山縁起」、(B)「立山地獄」、(C)「立山浄土」、(D)「芦峯寺布橋大灌頂」、(E)「立山禪定案内」の5つの内容で成立していることや、その絵解き台本と思しき『立山手引草』の内容も、上記の(A)(B)(C)(E)で成立していることが指摘されてきた。

立山曼茶羅の研究史を見ていくと、作品自体はその折々で新たな発見が相次ぎ今や49点に至るが、文献史料については研究に有効な史料が全く見つからず、先述の研究成果があたかも立山曼茶羅の絵解きの世界の全体像を語っているかの如くイメージされてきた感がある。

今回筆者が示した宝泉坊衆徒泰音の事例は、幕末の時期、そして特定の宿坊家、しかも大都市江戸という特殊な地域の事例といった問題点もあり、これ

が一般的な芦峯寺衆徒の立山曼荼羅を使用しての勸進活動の実態とは言い難い面があるが、それも十分考慮したうえで、従来の立山曼荼羅に関する画一的な研究方法、及び平板的な研究成果に対しかかなりの膨らみをもたせるものと考えている。

江戸時代後期、泰音は江戸の檀那場で商人や職人、下級武士らの庶民層にだけでなく、江戸城の関係者など近世身分制社会の最上層の人々までも布教・勸進活動を展開した。そうした人々の知識や教養、興味、あるいは寺請け制度上の帰属宗派は様々であり、彼らの受容にひとりひとり丁寧に応えるために、泰音は立山信仰の直接的な内容はもちろん、それだけではなく世の中の幅広い知識や教養が必要となったものと思われる。したがって、泰音の「招請」における話題も、単に立山曼荼羅の画像内容にとどまらず、その幅が多方面に広がっていったことは本稿の本論で指摘したとおりであり、それと連動して泰音が知識・教養を身につけるために次第に多くの書籍

を入手するようになり、自己の研鑽に励んだものと考えたい。宝泉坊の蔵書は、泰音が義父の照円から天保13年(1842)に家督を相続し、そののち毎年江戸の檀那場で廻檀配札活動を行うようになって軌道に乗った弘化4年(1847)頃から次第に蓄積されている。その背景には、泰音が生涯に多くの日記帳や諸記録を書き残した記録魔であったことから推されるように、自身の人並み外れた旺盛な知識欲や、檀那場が書籍の入手に有利な江戸であったこと、幕府老中の松平乗全をはじめとする諸大名など上級身分者と身近に接しなければならなかったことなど、特殊な条件があったことは忘れてならない。泰音の経歴を見るにつけて、もちろん本人の資質に依るところは大きいですが、それにも増して環境が人を成長させていくことを実感するのである。立山曼荼羅の絵解きの話題もこうした語り手の教養・知識次第であったに違いない。

註

- 1) 福江充編「立山曼荼羅研究関係文献目録」『立山曼荼羅 物語の空間 (54頁・55頁、富山県[立山博物館]、2005年)。立山曼荼羅に関する研究史を検討するには、上記の目録が参考になる。
- 2) 最後の芦峯寺衆徒として太平洋戦争後まもなくの時期まで、愛知県などで廻檀配札活動を行っていた芦峯寺泉蔵坊(富山市梅沢町の天台宗円隆寺)の佐伯秀胤氏が、昭和63年3月6日に立山町の佐伯省次氏宅で、同家の法事の折に行った立山曼荼羅絵解きの記録テープが残っている。これによって立山曼荼羅の

- 絵解きの雰囲気を知ることができる。佐伯泰正・福江充編「芦峯寺旧宿坊衆徒佐伯秀胤氏の立山曼荼羅絵解き(テープおこし:佐伯泰正、解説:福江充)」『立山曼荼羅 物語の空間』(47頁～52頁)。
- 3) 林雅彦「『立山曼荼羅』諸本攷の試み」(『国語国文論集7号』、1978年)、同「説話文学と絵解き—立山地獄と女人をめぐる周辺」(『伝承文学研究21号』、1978年)、同「〈翻訳〉『立山手引草』」(『学習院女子短期大学紀要16号』、1978年)、「絵解き台本『立山手引草』小攷」(『論纂説話と

- 説話文学』、笠間書院、1979年)。
- 4) 富山県[立山博物館]編『立山博物館イベント「立山曼荼羅を聴く」—絵解きの世界(林雅彦実演)』(富山県[立山博物館]、1995年)。林雅彦「絵解き台本『立山曼荼羅』」(『絵解き研究12号』、1996年)。
- 5) 林雅彦「絵解き口演 台本集『立山曼荼羅 絵解き』」(『日本の絵解き』サミット報告集 山岳霊場と絵解き)人間文化研究機構連携研究、2006年)。
- 6) DVD版・VHS版「米原寛の絵解き 立山曼荼羅(口演:米原寛、監修:林雅彦)」(北国新聞

- 社出版局、2008年)。
- 7) この章の一連の記述については、拙著『立山信仰と立山曼荼羅』(115～136頁、岩田書院、1998年)を参照のこと。
- 8) この章の一連の記述については、拙著『立山信仰と立山曼荼羅—芦峯寺衆徒の勸進活動—』(213頁～277頁、岩田書院、1998年)。拙著『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』(43頁～48頁・271頁～450頁、岩田書院、2002年)。拙稿「芦峯寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と『立山信仰』の展開(1)」(『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第15号』3頁～66頁、2008年)。拙稿「芦峯寺宝泉坊の江戸での檀那場形成と『立山信仰』の展開(2)—江戸時代後期の江戸城大奥及び諸大名家をめぐる立山信仰—」(『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第16号』59頁～77頁、2009年)。拙稿「江戸城大奥および諸大名家と布橋灌頂会」(『富山史壇 第160号』13頁～35頁、越中史壇会、2010年)。拙稿「幕末期の江戸城大奥や諸大名家をめぐる立山信仰」(『山岳修験 第45号』15頁～30頁、日本山岳修験学会、2010年)などを参照のこと。
- 9) 「懸事」については、芦峯寺教算坊が大坂で行っていた廻檀配札活動において、その呼称が見られる。拙稿「芦峯寺教算坊が大坂で形成した檀那場と立山曼荼羅」(『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第11号』33頁～52頁〔特に37頁・38頁〕、2004年)。
- 10) 宝泉坊の明治元年(1868)の廻檀日記帳Bの巻末には、立山曼荼羅を使用した勸進活動で得た賽銭を書き上げているが、その項目名に、「御絵伝様賽銭覚」と見え、さらにその下に「請待」と「招請」の用語が併記されている。そこでは、「請待」の用語が「招請」の用語よりやや大きく太く記されている。
- 11) 仏事法要を営んで、その功德が死者の死後の安穩をもたらすように期待すること。追善。回向が、葬儀や年忌法要など仏教儀式による死者供養や追善供養を意味する場合もごく一般的である。死者の冥福を祈る読経などの仏教儀式の執行によって、その功德を亡者の成仏促進にめぐる(作用する)ように、そしてさらにその功德が再び還って儀式を行う施主にめぐるように、という意味から、回向と呼ばれるようになったと考えられる。
- 12) 災いを除き願いをかなえるため、仏の加護を祈ること。印を結び真言を唱える。
- 13) 声を出して経文を読むこと。
- 14) 南無阿弥陀仏の六字の名号を10回唱えること。十たび仏を念ずること。念仏・念法・念僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・念死のこと。
- 15) 水を浴びて身を清めること。
- 16) 声明曲のこと。顕教立の法会最初に、導師が柄香炉を持つて、仏法僧の三宝に対して踴躍礼(作法で、膝を立ててしゃがむこと。)を三度しながら独唱する。
- 17) パーシヴァル・ローエル『NOTO』(ホートン・ミフリン書店〔ニューヨーク〕、1891年)。
- 18) パーシヴァル・ローエル著・宮崎正明訳『能登 人に知られぬ日本の辺境』(118頁・119頁、パブリケーション四季、1979年)。原本は(註22)著書。
- 19) 宝泉坊の嘉永6年(1853)の檀那帳(芦峯寺一山会所蔵)に「本所大河端椎ノ木松浦様御屋敷内、栴町三丁目谷永井興之助手共同居 一、寿信尼(印)」と記されている。宝泉坊泰音の弘化2年(1845)の『御初穂集高控』に「一、青銅四拾疋 松浦持誓様(持誓を線で消して寿信の名前を入れている)」と記されている。宝泉坊の天保10年(1839)の檀那帳(芦峯寺宝泉坊所蔵)に「两国。植木松浦様居屋敷之内、持誓尼御取持二而」と記されている。
- 20) 宝泉坊の慶応2年(1866)の檀那帳(芦峯寺雄山神社所蔵)に「人形町杉森庄助屋敷稱荷前一、左官忠七殿(印) ハシ、勤 寿信院実家、昼食」と記載されている。宝泉坊の嘉永6年(1853)の檀那帳(芦峯寺一山会所蔵)に「小舟町沓丁目新道 一、左官忠七(印)」と記載されている。
- 21) 宝泉坊の安政2年(1855)の檀那帳(芦峯寺宝泉坊所蔵)に

- 「廻町三丁目谷 一、永井興之助殿（印）」と記されている。
- 22) 宝泉坊の嘉永6年(1853)の檀那帳(芦峯寺一山会所蔵)に「本所大河端権ノ木松浦様御屋敷内、糶町三丁目谷永井興之助子共同居 一、寿信尼(印)」と記されている。宝泉坊の安政2年(1855)の檀那帳(芦峯寺宝泉坊所蔵)に「廻□(1字欠損)三丁目谷永井興之助様御内(この記載は貼り紙。その下には榎木松浦氏屋敷の住所あり) 一、寿信尼」と記されている。
- 23) 宝泉坊の慶応2年(1866)の檀那帳(芦峯寺雄山神社所蔵)に「本所大川橋権木松浦様御屋敷内 一、玉置将曹様 寿信尼諸道具并臺す等御納被成御懸候也」と記されている。
- 24) 拙稿「史料紹介『義賢行者当峯山籠中復讐』一木食聖義賢と芦峯寺一山」(『富山史壇 第138号』所収、60頁~68頁、越中央壇会、2002年)。
- 25) 三河国西尾藩六万石松平(大給)家第4代当主の松平乗全。
- 26) 三河国西尾藩六万石松平(大給)家第5代当主の松平乗秩。
- 27) 美濃国大垣藩10万石戸田家第9代当主の戸田氏正。安政3年10月に隠居し、左門と改名し、息子の氏彬に家督を譲った。松平乗秩の正室は戸田氏正の娘(美濃国大垣藩10万石戸田家第10代当主戸田采女正氏彬の妹・玉泉院)である。
- 28) 豊後国杵築藩三万二千石松平(能見)家第9代当主の松平親良(松平市正)。

第1表：御絵伝招請（立山曼荼羅を活用した勧進活動）の実態（その1）

No.	実施年月日（和暦）	実施年月日（西暦）	対象者（檀越）	対象者住所	呼称	招請の内容	取銭	白印
01/01	安政03年02月12日	1856/02/12	松平和泉守	松平和泉守屋敷	御曼荼羅	御曼荼羅祈禱所。		
01/02	安政03年02月22日	1856/02/22	團輪堂	岩井村	立山宮修園	團輪堂二而立山宮修園、村中不疑参拝仕。		
01/03	安政03年03月02日	1856/03/02	願濟寺（仏母座）	北本所馬場町	記載なし	記載なし		
01/04	安政03年03月04日	1856/03/04	三ツ屋備兵衛	記載なし	記載なし	記載なし		
01/05	安政03年03月07日	1856/03/07	片岡口（1字欠損）作	記載なし	記載なし	記載なし		
01/06	安政03年03月08日	1856/03/08	大沢相模守	愛宕下侍俵小幡	御絵伝請待	大沢相模守様江御絵伝請待二付参り。并神前仏前江口口（2字欠損）取銭。夫より昼食紅き。夫より湯銭。		
01/07	安政03年03月09日	1856/03/09	記載なし（片相か？）	記載なし	御絵伝弘通	御絵伝弘通取銭。		
01/08	安政03年03月10日	1856/03/10	松平市正	豊後村桑清松平家（外様田）	御絵伝請待・弘通	三田三郎より松平市正殿へ御絵伝請待二付参拝仕弘通致。夫より殿様并二奥様・御座様江僧加持口（1字欠損）印尚符差上申候。持前仏前拜礼。昼食き。一、八百疋、尚初穂下。一、百十二文、取銭。一、九百六十文、白印七人分女仕分。	112文	960文(経7人)
01/09	安政03年03月12日	1856/03/12	松平市正	豊後村桑清松平家（外様田）	記載なし	記載なし		
01/10	安政03年03月15日	1856/03/15/1	尾佐屋吉兵衛	記載なし	御絵伝弘通	菊川喜代松殿江より、尾佐屋吉兵衛請待二而参り御絵伝弘通候。一、貳百五十文、取銭。一、八百六文、白印也。一、貳百文、白印分。一、金壹朱、同崇布施。（中略）一、五拾疋、茶膳料。外貳百文、白印料。	250文	1006文
01/11	安政03年03月15日	1856/03/15/2	かるやきや口口（2字欠損）	記載なし	記載なし	記載なし		
01/12	安政03年03月18日	1856/03/18	佐野屋伊兵衛	深川本町	御絵伝三参り	深川本町佐野屋伊兵衛殿へ御絵伝三参り。一、貳百十文、取銭。一、九百文、白印。	210文	900文
01/13	安政03年03月22日	1856/03/22	柏屋伊助	内神田	御絵伝招請	内神田花田町代地家主伊助・柏屋伊助方へ御絵伝招請亦付参り。昼食致勤仕候事。一、貳百文、柏屋崇布施。一、九拾文、取銭同り。	092文	
01/14	安政03年03月23日	1856/03/23	寿信尼	極町	御絵伝相掛方并説法ノ後二放生会	極町永井奥之助様御内壽信尼へ参り。御絵伝相掛方并説法ノ後二放生会ニうなぎはなし。右作法八三礼、次二阿彌陀経。次二瓶ノ水中、さきを加持メ入レシ。一、貳百七拾文、白印式人分。一、貳百文、放生会料。一、金壹朱、寿信尼分。一、金壹朱、永井奥之助様分。		272文(2人)
01/15	安政03年03月24日	1856/03/24	三浦志守寺（安作山酒土）家臣・石井徳左衛門	虎御門（谷中之先三浦志守寺様御屋敷）	御絵伝相掛ル事	寅御門三浦志守寺様御内石井氏参り御絵伝相掛ル事。一、貳百文、取銭。一、八百貳十文、白印六人分。	200文	820文(6人)
01/16	安政03年03月26日	1856/03/26	早業隆幸七	栄口1丁目（炭店）	御絵伝相掛ル事	早業隆幸七殿へ参。其院御絵伝相掛ル事。一、百疋、御布施。一、百文、取銭也。一、金壹朱、百ノ川邊家塔代、栄口三丁目給屋甚七殿。	100文	
01/17	安政03年04月02日	1856/04/02	吉原阿木屋長兵衛	新吉原	御絵伝相掛仕候事	吉原阿木屋長兵衛殿へ参り御絵伝相掛仕候事。此内当年分御札差上候事。一、金壹朱、十月二日亡死人御向初。一、金壹朱、外二通向科。一、金壹朱、御布施料。一、金貳拾四文、白印序主清右衛門。一、百六拾四文、取銭（清右衛門）。一、貳百文、同家より。	164文	024文
02/01	安政05年12月07日	1858/12/07	石倉翠石衛門	信濃国小県郡長津藩	御絵伝相掛候事	同院石倉翠石江招夕祭儀下部絵伝出候事。		
02/02	安政05年12月08日	1858/12/08	羽妻田次右衛門	信濃国小県郡大門村	御絵伝弘通	一、同百十二文、同家御絵伝弘通。白印式人分。	112文	
02/03	安政05年12月10日	1858/12/10	佐藤重右衛門	信濃国小県郡和田宿（名主・赤井氏宅）	御絵伝弘通	其日佐藤氏御絵伝弘通いたし。一、百六拾八文、取銭。一、四百七拾拾文、白印十一本代。但シ一年切結切也。	168文	472文(経11本)
02/04	安政06年01月03日	1859/01/03	井沢伊兵衛	武蔵国深谷宿	御絵伝弘通仕	同家海老二而御絵伝弘通仕。一、百三十六文、中瀬屋河田北右衛門やそ白印。一、百文、同家御座崇布施。		136文
02/05	安政06年01月05日	1859/01/05	小林喜三郎	武蔵国標榜郡上根村	御絵伝相掛ル事	同院小林喜三郎殿御絵伝相掛ル事。一、三拾文、御取銭。一、五百五十文、白印四人分。尤下品也。其年口口（2字欠損）	032文	550文(4人)
02/06	安政06年02月01日	1859/01/29	中沢屋藤兵衛	江戸豊島島倉ノ榎角	当山崎山直依御絵伝	先年和泉守様へ御絵伝当山崎山直依御絵伝出候事。先同家二而為内様二階座敷二而皆々拜礼候事。其年正月廿九日江戸豊島島倉ノ榎角へ到来仕候事。先同家二而為内様二階座敷二而皆々拜礼候事。		
02/07	安政06年03月07日	1859/03/07	松平和泉守御奥	松平和泉守御奥	御絵伝初穂儀仕候事	三月七日、和泉大守様御奥二而御絵伝初穂儀仕候事。同八口口（2字欠損）初来。		
02/08	安政06年03月08日	1859/03/08	沢田昌仁兵衛	深川				
02/09	安政06年03月12日	1859/03/12	西廣清悦	松平善道寺様内（赤坂沼池黒田様御屋敷）	御絵伝	富津島より黒田様西廣へ御絵伝三参り。一、金壹朱、西廣道徳御布施。一、金貳朱三百文、白印。一、百文、白印。一、六十文、取銭。地シ園寺様、并二十七番増シ。	060文	2朱300文
02/10	安政06年03月13日	1859/03/13	黒田徳新兵衛	四谷信馬所	御絵伝相掛	同上三院、黒田屋二階座敷出候。二、百貳十四文、取銭あり。		124文
02/11	安政06年03月13日	1859/03/13	沢田昌仁兵衛	深川				
02/12	安政06年03月14日	1859/03/14	長谷川治兵衛	松平阿波守様内（南八丁目5丁目）				
02/13	安政06年03月14日	1859/03/14	西廣	松平善道寺様内（赤坂沼池黒田様御屋敷）				
02/14	安政06年03月16日	1859/03/16	石井徳左衛門	虎ノ背門内（三浦志守寺屋敷）	御絵伝三参り・弘通	石井徳左衛門殿御絵伝三参り。中實弘通之事。夫より仏前助儀。又夫より御絵伝において給家（1字欠損）茶室向仕候事。是より夕飯敷。一、貳百文、御布施。一、貳百三十二文、取銭。一、壹ノ三百六十八文、白印。	232文	1貫368文
02/15	安政06年03月17日	1859/03/17	野原徳造	松平和泉守深川屋敷	御絵伝御座敷取銭（以下欠損）	御絵伝御座敷取銭（以下欠損）		
02/16	安政06年03月19日	1859/03/19	中沢屋藤兵衛	江戸豊島島倉ノ榎角	御絵伝弘通仕候事	同十九日、中沢屋三郎、奥後、御絵伝弘通仕候事。一、貳百文、取銭あり。	200文	
02/17	安政06年03月20日	1859/03/20	松平市正（殿様・奥様・奥様）	外様田（松平河内守屋敷）	御絵伝弘通	中飯殿、夫より奥へ通り、殿様、奥様、お座様へ御座仕候事。御絵伝弘通。		
02/18	安政06年03月21日	1859/03/21	葛川喜代松	深川	御絵伝招請	是より深川葛川中へ参り。中井善哉御絵伝招請あり。一、金壹朱、中井善哉御布施。一、六百五十二文、取銭。一、壹ノ四百三十文、白印。	652文	1貫430文
02/19	安政06年03月21日	1859/03/21	中井善哉	深川	御絵伝招請			
02/20	安政06年03月21日	1859/03/21	沢田昌仁兵衛	深川				

第1表：御絵伝招請（立山曼荼羅を活用した勸進活動）の実態（その2）

No.	実施年月日（和暦）	実施年月日（西暦）	対象者（由来）	対象者住所	宗持	招請の内容	絵巻	白印
02/21	安政05年03月24日	1859/03/24	対象者（由来） 即遇寺	本所	御絵伝招請	招請の内容 本所即遇寺へ御絵伝招請二参り。中紙殿、寺仏前念仏（以下欠損）夫より絵伝三様、次二様、次念仏唱（以下欠損）、御佛成程、次十念様、夫より自由也、一、武百文、仏母庵御布施。一、武百文、清水（1字欠損）新井氏。一、金武朱巻六百文、白印。一、四百六十四文、貫銭。	461文	金2束1貫600文
02/22	安政05年03月24日	1859/03/24	沢田屋仁兵衛	深川				
02/23	安政05年03月25日	1859/03/25	丸屋茂左衛門	深川扇橋西町	招請	是より深川西町丸屋茂左衛門殿招請奉り。一、金巻朱、丸屋茂左衛門布施。一、三百六十五文、絵銭。二、金巻朱三百三十二文、白印。	365文	金1束312文
02/24	安政05年03月25日	1859/03/25	沢田屋仁兵衛	深川				
02/25	安政05年03月28日	1859/03/28	沢田屋仁兵衛	深川				
02/26	安政05年03月29日	1859/03/29	沢田屋仁兵衛	深川				
02/27	安政05年04月02日	1859/04/02	大沢船前守	奥若下持保小崎	御絵伝招請・御絵伝弘進	奥若下大沢船前守様御絵伝招請二付上り。仏前拜礼経任仕、夫より御絵伝弘進候。一、百三十六文、白印真島陸。一、武十四文、御符料。一、金巻朱、御廻向料。一、金武朱（以下欠損）	136文	
02/28	安政05年04月05日	1859/04/05	小林金平	下谷中袋街町中程	御絵伝掛ル事	夫より小林金平様へ参り、其日御絵伝掛候事。一、金口（1字欠損）朱、同寮御布施。一、四百十二文、白印三人分。	412文(3人)	
02/29	安政05年04月07日	1859/04/07	相模屋惣平治	小石川伝道院前	御絵伝招請	小石川寺境内殿御絵伝招請待世話人二而、向町相模屋佐治方御請（1字欠損）二付、参り、治り。一、三百文、相模屋御布施。一、武百文、白印も。一、三百三十六文、白印。一、三百五十六文、絵銭。	356文	3貫36文
02/30	安政05年04月08日	1859/04/08	寺内内蔵	小石川富富坂上御講堂殿敷	招請・御絵伝	是より寺内内蔵殿御絵伝招請二付参り。御絵伝前付いたし。夫より通商任候事。（中略）一、金巻朱、寺内内蔵御布施。一、武百文、御廻向料。一、武百七十二文、絵銭。	272文	
02/31	安政05年04月09日	1859/04/09	浄土宗西岸寺		招請・絵伝	浄土宗西岸寺江招請二付参り。（中略）夫より本堂、寺請氏等世話二而御絵伝候事。夫より少々納、念仏唱、演説は草上玉沙汰王座、彫刻御白如茶之座、其外色々御任候事。（中略）一、金武朱、西岸寺御布施。一、八百八文、白印。一、五百八文、絵銭。	508文	505文
02/32	安政05年04月12日	1859/04/12	新見内膳	小石川富富坂新町金剛寺坂	御絵伝招請	惣坊新見内膳様へ参り、御絵伝招請二付其治り。一、武百文、西の川原。一、武百七十二文、白印三人分。一、三百三十四文、絵銭。	334文	272文(2人)
02/33	安政05年04月14日	1859/04/14	平榮庵奎七	新橋（榮町1丁目）	御絵伝弘進いたし	是より新橋平榮庵へ参り、其日御絵伝弘進いたし。一、七十武文、絵銭。	072文	
02/34	安政05年04月15日	1859/04/15	遠州屋喜助	柴田町8丁目	御絵伝弘進候事	是より遠州屋喜助殿御絵伝招請二付参り。御絵伝弘進候事。一、金武朱、遠州屋当御布施。一、武百十六文、同寮絵銭。	216文	
02/35	安政05年03月15日	1859/04/15	伊勢屋半兵衛	石原町				
02/36	安政05年04月17日	1859/04/17	沢田徳兵衛	松平和泉寺深川屋敷	御曼荼羅招請・弘進	深川中御屋敷内沢田徳兵衛様へ御曼荼羅招請二付参り。仏前廻向仕。夫より弘進帯之通り。一、三百八十四文、沢田氏絵銭。一、四百十二文、白印。中紙欠損。	384文	412文
02/37	安政05年03月17日	1859/04/17	伊勢屋半兵衛	石原町				
02/38	安政05年04月21日	1859/04/21	淡屋金八	平野町（堀川表の堀邊とうふや裏）	御絵伝招請	平野町淡屋金八殿御絵伝招請参り。一、金巻朱、淡屋金八御布施。一、（以下欠損）、白印。一、武百文、宝珠。一、五百六十文、貫銭。一、百二十四文、午午札料。	560文	
02/39	安政05年05月01日	1859/05/01	長沢屋由松	本所町	御絵伝招請	長沢屋由松御絵伝招請二付、是後より参路仕り。一、金巻朱、同寮御布施。一、武百三十四文、絵銭也。一、金武朱三十四文、白印三十一人分。	234文	金2分2束34文(31人)
02/40	安政05年05月16日	1859/05/16	三河屋久次郎	山王町	御絵伝招請	是より京口榮平屋世話二而、御絵伝招請二付参り。三河屋久次郎、茶屋也。一、金巻朱、三河屋久次郎御布施。一、四百五十五文、絵銭。一、金巻朱三百三十六文、白印。	450文	金5束136文
02/41	安政05年05月	1859/05	富田屋（番町2丁目の富田屋幸次郎か、もしくは伊勢屋富田屋産四郎か）					
03/01	安政07年閏03月27日	1860/03/27	松平和泉寺深川屋敷	松平和泉寺深川屋敷	御絵伝拜礼	是より長屋へ庄屋方武十人斗り参り候二付、同々二而御絵伝等拜礼御申候へ候様御申候候事。		
03/02	安政07年04月09日	1860/04/09	拓殖軒四郎	松平和泉寺深川屋敷	御絵伝拜礼			
03/03	安政07年04月11日	1860/04/11	大竹口氏	松平和泉寺深川屋敷	御絵伝招請			
03/04	安政07年04月14日	1860/04/14	松平和泉寺深川屋敷	松平和泉寺深川屋敷	御絵伝招請			
03/05	安政07年04月14日	1860/04/14	松平和泉寺深川屋敷	松平和泉寺深川屋敷	御絵伝弘進いたし	深川御屋敷江御物見へ御絵伝招請奉り。尤も勸進係遣之世話二而参り候事。深川若殿様御御様へ御目見。夫より御物見三州御領分庄屋方参り候二付、御絵伝弘進いたし。家中共参進いたし。一、金百三、三州西尾在村々役人中より。一、六百四文、同参進人より絵銭。	604文	
03/06	安政07年04月15日	1860/04/15	沢田屋仁兵衛	深川北六間堀下ノ橋	御絵伝招請	沢田屋仁兵衛方へ行、夫より御絵伝招請二付是後より掛候事。一、沢田屋仁兵衛御布施。一、四百文、絵銭。一、武五百八十八文、白印。一、武百文、西の川原室塔分。一、四百文。（以下略）	400文	2貫580文
03/07	安政07年04月21日	1860/04/19	余理寺	牛込高田馬場下	御絵伝	同日御絵伝候事二而御進上之。		
03/08	安政07年04月19日	1860/04/19	淺辺内斎	西国村松元矢ノ倉	御絵伝	淺辺内斎様喜國院不味妙法大持法事遠役二付、御絵伝并御願懸々御願願方へ参詣二付、酒祝いたし。		
03/09	安政07年04月20日	1860/04/20	大竹氏					
03/10	安政07年04月23日	1860/04/23	尾高新兵衛	水野出羽守屋敷	招請	水野出羽守様御屋敷尾高新兵衛へ招請二付参り。一、武百文、御布施。一、百八十七文、絵銭。一、百三十六文、白印尾高様。	187文	136文
03/11	安政07年04月24日	1860/04/24	仏母庵	北本所馬場町	御曼荼羅掛ル	御曼荼羅掛候事。一、三百六十四文、絵銭。一、金巻朱三束巻七百三十六文、白印。一、武百文、慶主御布施。一、仏母庵願願より取次。	364文	金1分3束1貫736文
03/12	安政07年04月24日	1860/04/24	淺辺内斎	西国村松元矢ノ倉	御絵伝招請	淺辺内斎より土手四番町小宮山様御絵伝招請二付参り。一、武百文、小宮山氏より布施。一、武百文、同。一、武百七拾武文、白印三人分。一、百文、貫銭。是より福田屋行参り。一、三十六文、福田屋御願懸候。	100文	272文(2人)
03/13	安政07年04月25日	1860/04/25	小宮山傳助	牛込高田之内土手四番町	御絵伝招請	淺辺氏より土手四番町小宮山様御絵伝招請二付参り。一、武百文、小宮山氏より布施。一、武百文、同。一、武百七拾武文、白印三人分。一、百文、貫銭。是より福田屋行参り。一、三十六文、福田屋御願懸候。	036文	
03/14	安政07年04月25日	1860/04/25	福田屋新兵衛	四谷	御絵伝候	戸田様御屋敷大竹友彦様参り、御曼荼羅招請二付。一、巻九百六十文、白印。一、絵銭。一、百文、大竹友彦御布施。		1貫960文
03/15	安政07年04月26日	1860/04/26	大竹友彦（大竹免毛彦）	四谷新屋敷（戸田安之助下屋敷）	御曼荼羅招請三付			

第1表：御絵伝招請（立山曼荼羅を活用した勸進活動）の実態（その3）

No.	実施年月日（和暦）	実施年月日（西暦）	対象者（檀家）	対象者住所	行状	招請の内容	献銭	白印
03/16	安政07年01月26日	1860/04/26予定	松平大隅守					
03/17	安政07年04月27日	1860/04/27予定	平野屋方右衛門（真言宗）					
03/18	安政07年04月28日	1860/04/28	石井徳左衛門	虎ノ御門内（三清志摩守屋敷）	招請	三清志摩守御内石井徳左衛門招請二付参り。成者一々匠上候。一、百五拾番割、献銭也。一、銭百十式朗、石井氏布施。一、百両、殿様布施分。一、金壹朱、白印十四人分。	151両	金1朱1貫508文(14人)
03/19	安政07年04月28日	1860/04/28予定	大竹氏（大竹夷毛産）					
03/20	安政07年04月29日	1860/04/29	松平大隅守	不明	御絵伝招請	沐浴、白衣二面、約諾之通り大隅守様へ上ル。御絵伝招請二付、尤澄潔仕り上り、尙加待申上候事。一、金百疋、御旗様より布施。一、式百三十三文、献銭也。一、金壹朱、白印百三拾文、白印。	232文	金1朱1貫132文
03/21	安政07年05月05日	1860/05/05/1	中井普蔵	深川	招請	深川世孫人寄川喜代松殿へ参り。是より中井普蔵殿へ招請二付、怪子講中方口（1字欠損）り。一、金壹両壹朱、式五拾六文、白印。一、百三十六文、御札料。一、九百四文、献銭也。石丸徳五郎様泊り。其傍御絵伝掛。一、百貳拾文、献銭。一、式百文、御向料。一、三百文、宝珠料。一、五百五十文、白印。	904文	金1両1朱2貫56文
03/22	安政07年05月05日	1860/05/05/2	石丸徳五郎	深川	御絵伝掛	深川世孫人寄川喜代松殿へ参り。是より中井普蔵殿へ招請二付、怪子講中方口（1字欠損）り。一、金壹両壹朱、式五拾六文、白印。一、百三十六文、御札料。一、九百四文、献銭也。石丸徳五郎様泊り。其傍御絵伝掛。一、百貳拾文、献銭。一、式百文、御向料。一、三百文、宝珠料。一、五百五十文、白印。	120文	550文
03/23	安政07年05月06日	1860/05/06	寺嶋内蔵	小石川西富坂上御旗除障敷	招請	石丸氏より小石川寺嶋氏へ招請二付参り。泊り。一、三百三十一文、賽銭。一、金貳朱、三百十文、血糞分。一、式百文、御向料。一、金壹朱、御旗様より。	331文	金2朱310文(怪)
03/24	安政07年05月07日	1860/05/07/1	頼岡頼母	小日向庵様	御曼荼羅招請	寺嶋内蔵より御旗様へ御曼荼羅招請二付、寺嶋内室間道二面参り。一、百八十文、献銭。一、金壹分貳文、白印。一、式百文、頼岡様より御向料。一、金壹朱、白印様より布施。一、金壹朱、御旗様より布施。一、白露式也、邑林院様より。	180文	金1分2貫文
03/25	安政07年05月07日	1860/05/07/2	相模屋佐平治	小石川伝道院前	招請	是より小石川相模屋佐平治招請二付参り。其傍泊り。一、百六十文、献銭。一、金壹朱、相模屋様。一、式百文、御向料。	160文	
03/26	安政07年05月09日	1860/05/09	富田屋彦四郎	伊勢町	招請	伊勢町富田屋彦四郎殿招請二付参り。泊り。其夜、念仏。一、金貳朱、御布施。一、金百貳文、白印。一、金百三十二文、西の川原へ。一、百五文、献銭。	105文	1貫312文
03/27	安政07年05月11日	1860/05/11	伊勢安兵衛	吉原				
03/28	安政07年05月16日	1860/05/16	松平和泉守	松平和泉守屋敷	御絵伝招請	沐浴いたし、白衣、松平和泉守様へ参殿、御絵伝招請二付参り。一、金百疋、御布施。		
03/29	安政07年05月20日	1860/05/20	大沼屋前守	安宮下持保小路				
03/30	安政07年05月22日	1860/05/22	本所多目角	本所多目角				
04/01	文久01年01月26日	1861/01/26	藤村利兵衛	藤木村	弘通献銭	一、式百貳拾文、弘通献銭。	212文	
04/02	文久01年02月15日	1861/02/15	不明	不明	御絵伝掛	御絵伝掛。一、七十文、献銭。	072文	
04/03	文久01年03月09日	1861/03/09	中井普蔵	深川持保屋前	欠損・不明	欠損・不明		
04/04	文久01年03月18日	1861/03/18	小林金平	下谷中屋伝町中	欠損・不明	欠損・不明		
04/05	文久01年03月21日	1861/03/21	小宮山利助	牛込御門之内土手白番町	口口（欠損）茶種掛ル	小宮山利助様へ参り、口口（欠損）茶種掛ル。一、七十二文、小宮山様献銭。一、六十文、茶代。一、金百三拾六文、白印。	072文	1貫216文
04/06	文久01年03月24日	1861/03/24	仏母庵	北本所馬場町	招請	仏母庵招請二付参り。宣明院路向仕。夫より曼荼羅前二口（1字欠損）仏向、御旗様、夫より十念授身、夫より演説いたし。（以下所々欠損）		
04/07	文久01年03月29日	1861/03/29/1	松平大隅守		御絵伝招請	松平大隅守様へ参り御絵伝招請掛ル。一、金百疋、御布施。一、金九百十三文、白印。一、三百七十六文、献銭。六百五十五両しいたし。（以下所々欠損）	376文	1貫913文
04/08	文久01年03月29日	1861/03/29/2	三河屋長三郎	四谷6丁目	御絵伝掛ル	四谷六丁目三河屋長三郎御旗様より御絵伝掛ル。（以下所々欠損）		
04/09	文久01年03月30日	1861/03/30	柴屋喜兵衛	赤坂	御絵伝掛ル	赤坂柴屋喜兵衛方へ御絵伝掛ル参り。一、金壹朱、御布施。一、九百六十文、白印七人分。一、八十四文、献銭。一、金百三拾文、白印。	084文	960文(7人)
04/10	文久01年04月02日	1861/04/02	三笠平兵衛	小石川御門内松平掛御守様御中屋敷	御絵伝招請掛成座	是より小石川河内高松持保屋敷三笠平兵衛殿参り曼食いたし。上様へ御絵伝掛成座成座付。其夜曼食世孫亦御絵伝三笠平兵衛。		
04/11	文久01年04月04日	1861/04/04	高杉屋平吉	田所町	招請、御絵伝掛ル	高杉屋平吉方へ招請二付参り御絵伝掛ル。路向仕候。一、三百五十文、賽銭。一、金百五十六文、白印十一人分。一、金貳朱、高杉様布施。一、三百文、隔り半井氏より格下	350文	(1貫506文(11人))
04/12	文久01年04月06日	1861/04/06	石井	記載なし	記載なし			
04/13	文久01年04月08日	1861/04/08	伝道院	小石川	御絵伝招請	深川世孫人寄川喜代松殿参り御旗様御旗様。御絵伝招請。一、金壹朱、御布施。一、式百文、御向料。一、式百十四文、白印。一、三百八十一文、献銭。	381文	214文
04/14	文久01年04月09日	1861/04/09	寺嶋内蔵	小石川西富坂上御旗除障敷内	招請、一ノ谷七番通	一ノ谷七番通。一、式百十四文、白印。一、三百八十一文、献銭。		
04/15	文久01年04月10日	1861/04/10/1	伝道院の女中方	小石川	弘通	伝道院江参り女中方へ参詣御旗様。一、金壹朱、御布施。一、式百文、御向料。一、七十文、献銭。一、四百一十文、白印三人分。	072文	412文(3人)
04/16	文久01年04月10日	1861/04/10/2	舟屋与七	小石川伝道院前表町	弘通	是より舟屋前助舟屋与七殿参り泊り。舟屋与七弘通。		
04/17	文久01年04月11日	1861/04/11	大沼屋前守	安宮下持保小路	招請、弘通	安宮下大沼屋前守様招請二付参り。神前宣明院。次二弘通いたし。一、金貳朱五十文、白印。	50文	金2朱50文
04/18	文久01年04月12日	1861/04/12	尾張屋半七	小石川御旗町	招請	寺嶋内蔵二人而小石河おたん守町尾張屋半七殿招請二付参り泊り。一、金壹朱、尾張屋半七御旗。一、式百文、御札料。金壹朱百文、献銭。	100文	金1朱100文
04/19	文久01年04月13日	1861/04/13/1	小田徳太郎	小石川浄土	招請	小石川浄土小田徳太郎殿招請二付参り。寺嶋氏之伴也。一、金壹朱、御布施。一、百文、献銭。	100文	
04/20	文久01年04月13日	1861/04/13/2	鈴木岩五郎	小石川儀匠町	招請	同隣小石河鈴木岩五郎招請二付参り泊り。一、金壹朱、布施。一、式百文、御向料。一、式百文、献銭。一、百三十七文、白印。	200文	136文
04/21	文久01年04月14日	1861/04/14/1	頼岡頼母	小日向庵様	招請	頼岡様招請二付。一、式百十四文、白印。同金五十疋、邑林院様より。一、金壹朱、真心院様より。一、金三朱参り百七十文、白印。	124文	金3朱1貫170文

第1表：御伝招請（立山曼荼羅を活用した勧進活動）の実態（その4）

No.	実施年月日（和暦）	実施年月日（西暦）	対象者（檀越）	対象者住所	呼称	招請の内容	紙数	白印
04/22	文久01年04月14日昼	1861/04/14/2	三笠半兵衛	小石川御門内松平康政守様御中	招請	高松様御願敷三笠半兵衛御願招請奉付参り。一、金五十疋、御布施。一、紙銭。一、香朱、中村六之助母。一、茶六疋百五十文、白印。		1貫650文
04/23	文久01年04月14日昼	1861/04/14/3	相模屋佐平治	小石川伝通院前	御掛	同院伝通院前相模屋佐平治殿へ御招請奉付参り。一、香朱、御布施。一、貳百文、蓮向料。一、貳百文、紙銭。一、金貳朱口口（2字欠損）七十一文。	200文	巻2朱口口71文
04/24	文久01年04月15日～04月16日	1861/04/15/～16	安芸広島藩の松田上屋敷	森ヶ岡	御曼荼羅招請	伝通院大宣旨正より世話二高懸ヶ岡芸州様御住居へ御曼荼羅招請被為在候事。		
04/25	文久01年04月19日	1861/04/19	永井禎之助	白菊坂	御絵図招請	伝通院傳正并御内役大存・興堂、寮司大京お世話二高、白菊坂永井禎之助様御絵図招請奉付参り。		
04/26	文久01年04月20日	1861/04/20	永井本之丞	本郷御河町	弘通	伝通院より永井様へ参り弘通仕候事。		
04/27	文久01年04月21日～05月05日	1861/04/21/～05/05	江戸城本丸・二の丸					
04/28	文久01年04月22日	1861/04/22	越後谷堀殿		記載なし	記載なし		
04/29	文久01年04月26日	1861/04/26	稻葉様杉木氏		欠損	欠損		
04/30	文久01年04月30日	1861/04/30	長沢屋由松		本封切	記載なし		
04/31	文久01年05月03日	1861/05/03	中田兵衛		小石川伝通院御願敷	記載なし		
04/32	文久01年05月09日～05月20日	1861/05/09/～05/20	尾張名古屋藩の市ヶ谷御門外守屋敷と紀伊和歌山藩の赤坂磯津外中屋敷	市ヶ谷御門外、南八丁堀				
04/33	文久01年05月25日～05月26日	1861/05/25/～05/26	加賀金沢藩の本郷守屋敷	本郷				
05/01	文久03年03月05日	1863/03/05	奥屋重兵衛	下谷車坂町	記載なし	記載なし		
05/02	文久03年03月03日	1863/03/03	小宮山利助	牛込宮門之内土手四番町	記載なし	記載なし		
05/03	文久03年03月24日	1863/03/24	仏母殿	北本所馬場町	招請	本所仏母殿江招請奉付参り。		
05/04	文久03年04月01日	1863/04/01	和泉屋半兵衛	南本所石原町	御絵図招請	本所石原和泉屋半兵衛殿御絵図招請奉付参り。		
05/05	文久03年04月02日	1863/04/02	横山殿吉吉	深川高川町	招請	深川高川横山殿吉吉へ招請奉付参り。		
05/06	文久03年04月05日	1863/04/05	堀本殿梅吉	深川高川町	招請	堀本殿梅吉へ招請奉付参り。		
05/07	文久03年04月06日	1863/04/06	坂田（野）屋善兵衛	深川高川町	招請	深川高川坂田（野）屋善兵衛殿へ招請奉付参り。		
05/08	文久03年04月07日	1863/04/07	加茂屋戸七	本所中ノ島元町	招請	本所中ノ島元町加茂屋戸七殿招請奉付参り。		
05/09	文久03年04月13日	1863/04/13	喜多村清兵衛	本所中ノ島角	招請・御絵図弘通	本所中ノ島角喜多村清兵衛殿招請奉付参り。玉光院全口（1字欠損）妙蓮信女子正月十三日御絵図弘通様。		
05/10	文久03年04月15日	1863/04/15	飯沼善治郎	深川田安様御願敷	招請	深川田安飯沼善治郎殿招請奉付参り。		
05/11	文久03年04月19日	1863/04/19	西園徳斎	西園徳町元矢ノ倉	記載なし	記載なし		
05/12	文久03年04月23日	1863/04/23	武谷新之進	南八丁堀5丁目松平阿波守様御願敷内	招請	同院武谷新之進様招請奉付参り。		
05/13	文久03年04月24日	1863/04/24	仏母殿（即願寺）	北本所馬場町	記載なし	記載なし		
05/14	文久03年04月28日	1863/04/28	土屋	記載なし	記載なし			
05/15	文久03年05月10日	1863/05/10/1	娘後久留米濱有馬家	三田	御絵図	同廿六日御絵図土屋様へ指上候旨、廿七日彦次江指下り。		
05/16	文久03年05月10日	1863/05/10/2	三河屋文七	後田儀前町	招請	三河屋文七殿へ招請奉付参り。一日法談御座候事。		
05/17	文久03年05月11日	1863/05/11	興堂	芝山内山下谷大明堂	御絵図	三河屋より芝山内山下谷大明堂江参り。三田有馬様御招請奉付、御絵図・縁起二高懸堂様相模御座候事。		
05/18	文久03年05月16日	1863/05/16	伊勢谷首兵衛の母	堀町1丁目	記載なし	記載なし		
05/19	文久03年05月18日	1863/05/18	興堂	芝山内山下谷大明堂	御絵図	芝山内山下谷大明堂へ参り。興堂様二御目二懸り三田有馬様より御絵図御下り二相成候二付。		
05/20	文久03年05月19日	1863/05/19	宗羽寺	牛込高田馬場下	招請・弘通	牛込高田寺招請奉付参り。弘通仕。一、金貳拾番櫻心願しいたし。		
05/21	文久03年05月20日	1863/05/20	相模屋佐平治	小石川伝通院前	招請	小石川相模屋佐平治殿招請奉付参り。		
05/22	文久03年05月21日	1863/05/21	寺島内殿	小石川高富殿上御機殿願敷内	招請	小石川高富殿内寺島内殿招請奉付参り。		
05/23	文久03年05月22日	1863/05/22	三笠半兵衛	小石川御門内松平康政守様御中	御絵図	高松様御願敷三笠半兵衛二行泊り。御絵図（以下欠損）		
05/24	文久03年05月23日	1863/05/23	宮沢行之助	小石川同心町	記載なし	記載なし		
05/25	文久03年05月24日	1863/05/24	松沢屋作	小石川高富町	招請	松沢屋作殿招請奉付参り。		
05/26	文久03年05月25日	1863/05/25	丸屋盛蔵	小石川仲町（豆腐屋）	招請	小石川仲町丸屋盛蔵殿招請奉付参り。		
05/27	文久03年05月26日	1863/05/26	外屋与七	小石川伝通院前	記載なし	記載なし		
05/28	文久03年05月27日	1863/05/27/1	朝岡精母・鳥林院	小石川高富町	招請	朝岡様へ参り鳥林院様招請奉付上ル。		
05/29	文久03年05月27日	1863/05/27/2	加茂屋喜助	牛込高田下五軒町	招請	加茂屋喜助殿招請奉付参り。		
05/30	文久03年06月04日	1863/06/04	石之園宅	横濱山下町	招請	横濱山下町石之園宅へ招請奉付参り。		
05/31	文久03年06月08日	1863/06/08	蛇目弄七	堀町1丁目	招請	上州屋弄助方招請奉付参り。		
06/01	文久03年06月09日	1863/06/09	上州屋弄助	四谷高島町1丁目	招請	上州屋弄助方招請奉付参り。		
06/02	文久03年06月13日	1863/06/13	浪田廣仁兵衛	深川北六軒屋下ノ橋	招請	深川浪田殿招請奉付上ル。署名川用し。■ヲ以思頼すれ者■ 徳二流之願し。		
06/03	文久03年07月04日	1863/07/04	近江屋彦治郎	四谷高島町1丁目	招請	近江屋彦治郎殿招請奉付。		
06/04	文久03年07月22日	1863/07/22	川住市右衛門	御曼荼羅弘通	御曼荼羅弘通	御曼荼羅弘通之趣、川住市右衛門様へ御願し申上置候所、當院堂二高懸御座候事。御曼荼羅弘通候旨、(中略)小町願し、御座候旨に参り候事。		
06/05	文久03年07月23日	1863/07/23	布袋屋仁左衛門	御曼荼羅弘通	御曼荼羅弘通	口口（2字欠損）御曼荼羅弘通候旨に参り候事。署名川用し。■ヲ以思頼すれ者■ 徳二流之願し。		
06/06	文久03年07月24日	1863/07/24	布袋屋仁左衛門	招請	招請	布袋屋仁左衛門方御座候二高懸今川村家跡招請奉付参り。		
06/07	文久03年07月27日	1863/07/27	布袋屋仁左衛門	招請	招請	是より戸倉在上徳まつ村石衛門方へ尋ね泊り。林助の母二曼荼羅願。一、百四拾貳文。	142文	
06/08	元治02年02月01日	1865/02/01	文右衛門	戸倉在上徳まつ村	曼荼羅	同所願候也。		
06/09	元治02年02月03日	1865/02/03	風下作治郎	土樋村	御曼荼羅	九百五十文、土樋村風下作治郎泊り。御曼荼羅願。茶太殿御願上ル。	950文	
06/10	元治02年02月11日	1865/02/11	関沢村	関沢村	御絵図	一、貳百文。関沢村周治郎二泊り。御絵図掛ヶ村中小牛玉札巻杖ツツ配札候事取究申候。		

第1表：御絵伝招請（立山曼荼羅を活用した動進活動）の実態（その5）

No.	要請年月日（和暦）	実行年月日（西暦）	対象者（檀家）	対象者住所	行状	招請の内訳	総額 金3朱	白印
06/04	元治02年02月12日	1865/02/12	開治郎	開治町	御絵伝	一、貳百文、開治町開治郎三治り、御絵伝掛ケ付中小牛五札等枚ツツ配札儀事取究申候 二、真田屋も三條上ル、一、貳百文、村中尚初穂、二、金三朱、御絵伝。		
06/05	元治02年02月25日	1865/02/25	記載なし	記載なし	御曼荼羅	一、貳百三十文、御曼荼羅掛帳儀	232文	
06/06	元治02年02月28日	1865/02/28	新田六右衛門	久下村	御絵伝	一、四百二十文、高野三人分、二、貳百五十文、御絵伝掛ケる帳儀、	250文	412文(3人)
06/07	元治02年03月13日	1865/03/13	赤沼伊兵衛	高田村	御曼荼羅	一、五百二十文、御曼荼羅帳儀、二、八百二十文、白印六人分。	520文	820文(6人)
06/08	元治02年03月26日	1865/03/26/1	久右衛門	赤沼	御絵伝	廿六日願、高野掛ケル。		
06/09	元治02年03月26日	1865/03/26/2	利兵衛	高田村	御絵伝	一、七百文、同村利兵衛白印、一、五百文、御絵伝帳儀。	500文	700文
06/10	元治02年04月16日	1865/04/16	福田屋	口谷佐馬町1丁目（足袋付屋）	記載なし	記載なし		
06/11	元治02年04月24日	1865/04/24/1	仏傳屋	北本所馬場町	御絵伝弘通	本所仏傳屋江御絵伝弘通三参り、		
06/12	元治02年04月24日	1865/04/24/2	小富山利助	牛込御門之内土手四番町	記載なし	記載なし		
06/13	元治02年05月08日	1865/05/08	石井徳左衛門	牛込御門内（三浦志摩守内）	招請	石井氏江招請奉付参り、		
06/14	元治02年05月10日	1865/05/10	中川与四郎	寺、曼荼羅掛帳儀内	招請	同曼荼羅内中川與四郎殿招請奉付参り、		
06/15	元治02年05月19日	1865/05/19	来迎寺	牛込赤田馬場下	御絵伝弘通	牛込来迎寺江参り、御絵伝弘通奉供儀量強しいたし、		
06/16	元治02年05月20日	1865/05/20	寺嶋四郎	小石川西富坂上御繪伝掛帳儀内	招請・弘通	寺嶋門前殿江参り、招請奉付参り治り弘通いたし、		
06/17	元治02年05月21日	1865/05/21	阿原与七	小石川伝通院南町	記載なし	記載なし		
06/18	元治02年05月22日	1865/05/22	三笠平兵衛	小石川御門内松平御崎寺様御中屋敷	記載なし	高松様三笠様へ参り曾我強しいたし、		
06/19	元治02年05月23日	1865/05/23	中村六之助	小石川御門内松平御崎寺様御中屋敷	招請	中村六之助様招請奉付参り、		
06/20	元治02年05月24日	1865/05/24/1	玉屋豊蔵	小石川仲町	御絵伝	小石川玉屋行、御絵伝懸ル。		
06/21	元治02年05月24日	1865/05/24/2	富沢行の助	小石川同心町	招請	富沢様招請奉付参り、		
06/22	元治02年05月25日	1865/05/25	飯沼直作	小石川西富坂	記載なし	記載なし		
06/23	元治02年05月26日	1865/05/26	飯山本多様市村氏	小石川新坂飯山藩本多様中屋敷内	招請	飯山藩本多相模守様小石川新坂也、招請奉付参り、		
06/24	元治02年05月27日	1865/05/27	相模屋佐平治	小石川伝通院前	招請・御絵伝	相模屋佐平治殿、招請奉付寄帳懸ケリ治り、		
06/25	元治02年05月28日	1865/05/28/1	つたや	記載なし	記載なし	記載なし		
06/26	元治02年05月28日	1865/05/28/2	腕川屋善兵衛	招請	招請奉付参り、			
06/27	元治02年閏05月03日	1865/05/03	加賀屋喜助	牛込赤田下五軒町	記載なし	記載なし		
06/28	元治02年閏05月04日	1865/05/04	伊勢谷善兵衛	麹町13丁目	記載なし	記載なし		
06/29	元治02年閏05月05日	1865/05/05	丹波屋源兵衛	牛込代次町	招請	牛込配札、代次町丹波屋源兵衛、招請奉付、治り、		
06/30	元治02年閏05月06日	1865/05/06	大村源太（次）郎	市ヶ谷三番町	招請	大村源太殿様へ招請奉付参り治り、		
06/31	元治02年閏05月07日	1865/05/07	左官豊蔵	記載なし	記載なし	記載なし		
06/32	元治02年閏05月08日	1865/05/08	朝岡精母・色林院	小日向童庵橋	招請	朝岡精母様色林院様江招請奉付参り、		
06/33	元治02年閏05月13日	1865/05/13	江坂下庵	浅草雷門前日音院寺内いろは長屋敷5番	招請	江坂下庵様招請奉付参り、		
06/34	元治02年閏05月16日	1865/05/16	楳木厚梅吉	深川富川町	招請	富川町梅吉殿招請奉付参り来ル、三罪堂算女強しいたし、		
06/35	元治02年閏05月17日	1865/05/17	左官善之助	南本郷石原町掛帳	招請	左官善之助殿招請奉付参り治り、三罪堂之御強しいたし候事、		
06/36	元治02年閏05月19日	1865/05/19	太田屋善太郎	本所松井町2丁目（新橋側）	招請	是より深川松井町太田屋善太郎殿招請奉付参り治り、		
06/37	元治02年閏05月20日	1865/05/20	深川善平野町（大工）	深川善平野町（大工）	招請	是より早野町小口屋善吉殿招請奉付参り治り、		
06/38	元治02年閏05月21日	1865/05/21	伏見屋徳右衛門	深川上本郷三好町	記載なし	記載なし		
06/39	元治02年閏05月30日	1865/05/30	太田屋善三郎	本所松井町2丁目	招請	本所松井町氏目太田屋善三郎殿招請奉付参り治り、		
06/40	元治02年閏06月01日	1865/06/01	太田屋徳三郎	本所松井町2丁目	記載なし	太田屋徳三郎殿参り治り、母山様之御強しいたし候事、		
06/41	元治02年閏06月10日	1865/06/10	中村厚成五郎	深川橋橋	招請	深川橋橋中村厚成五郎殿招請奉付参り治り、		
06/42	元治02年閏06月15日	1865/06/15	三河屋文士	橋田橋前町	記載なし	記載なし		
06/43	元治02年閏06月16日	1865/06/16	太田屋徳三郎	橋田橋前町	招請	芝草下村太田屋徳三郎殿招請奉付参り治り、		
06/44	元治02年閏06月17日	1865/06/17	大沢主馬	愛宕下神保小路	招請	大沢主馬様招請奉付参り、大どん、(森)王強し、		
06/45	元治02年閏06月18日	1865/06/18	大坂屋忠兵衛	新吉原	招請	大坂屋忠兵衛招請二振り、		
06/46	元治02年閏06月22日	1865/06/22	永井半正	愛宕井草屋松空堂（分橋田）	記載なし	記載なし		
06/47	元治02年閏06月28日	1865/06/28	永井太之丞	本郷御崎町	招請	永井太之丞様御湯江招請奉付参り治り、様名川強しいたし、		
06/48	元治02年07月28日	1865/07/28	河内屋兵衛	河内屋徳三郎	御絵事	河内屋徳三郎様行中忠井二立山御徳慕しいたし指上ル事、		
07/01	慶応03年04月24日	1867/04/24	仏傳屋	北本所馬場町	招請	本所仏傳屋招請、善後六根強し、		
07/02	慶応03年05月07日	1867/05/07	松平和泉守深川屋敷	深川	記載なし	記載なし		
07/03	慶応03年05月15日	1867/05/15	永道寺	牛込高田馬場下	招請	永道寺江招請二付、十善井様参強しいたし候事、		
07/04	慶応03年05月16日	1867/05/16	相模屋佐平治	小石川伝通院前	招請	相模屋佐平治殿招請也、		
07/05	慶応03年05月17日	1867/05/17	寺嶋四郎	小石川西富坂上御繪伝掛帳儀内	招請	寺嶋門前様招請、		
07/06	慶応03年05月18日	1867/05/18	富沢行の助	小石川同心町	招請	富沢氏招請二付参り治り、		
07/07	慶応03年05月19日	1867/05/19	小田徳太郎	小石川大塚町	招請	小田徳太郎殿等為氏世承二而終奉付招請被成候事、		
07/08	慶応03年05月20日	1867/05/20	橋田屋長治郎	小石川大塚町	記載なし	記載なし		
07/09	慶応03年05月21日	1867/05/21	加賀屋喜助	牛込赤田下五軒町	招請	加賀屋喜助殿招請奉付参り治り、		
07/10	慶応03年05月22日	1867/05/22	河合合太郎	麹町山王前羽橋御屋敷	招請	河合氏参招請奉付、		
07/11	慶応03年05月23日	1867/05/23	市ヶ谷大郎	市ヶ谷	招請	市ヶ谷大郎様江招請奉付治り、		
07/12	慶応03年05月24日	1867/05/24	仏傳屋	北本所馬場町	記載なし	仏傳屋江参之御強三度強しいたし、		
07/13	慶応03年05月27日	1867/05/27	本向町	本向町	招請	長沢屋招請奉付、		
07/14	慶応03年05月29日	1867/05/29	左官善之助	南本郷石原町掛帳	招請	左官善之助殿招請奉付、		

第1表：御絵伝招請（立山曼茶羅を活用した勸進活動）の実態（その6）

No.	実行年月日（和暦）	実行年月日（西暦）	対象者（植家）	対象者住所	行状	招請の内容	枚数	印白
07/15	慶応3年06月01日	1867/06/01/1	中井持吉	深川持徳屋敷門前	招請・御絵伝招	深川富川町中井持吉殿江招請承付奉り。御絵伝籍書招請也。		
07/16	慶応3年06月01日	1867/06/01/2	西尾厚吉	深川持徳	記載なし	記載なし		
07/17	慶応3年06月02日	1867/06/02	万原市三郎	深川永代寺門前（山本町家主）	記載なし	記載なし		
07/18	慶応3年06月03日	1867/06/03	松平和泉守深川屋敷	深川	記載なし	記載なし		
07/19	慶応3年06月04日	1867/06/04	原屋守		記載なし			
07/20	慶応3年06月06日	1867/06/06/1	伊勢屋備兵衛	深川新橋西町	招請	吉野伊勢屋備兵衛殿招請承付奉り。		
07/21	慶応3年06月06日	1867/06/06/2	家主久兵衛	小石川大塚町	記載なし			
07/22	慶応3年06月07日	1867/06/07	近江屋孝玄衛門	深川東平町（材木店）	招請	近江屋招請承付奉り。地蔵尊之御湯し有之候事。山口屋仁兵衛殿招請承付奉り。種々御事有之候事。		
07/23	慶応3年06月13日	1867/06/13/1	山口屋仁兵衛	坂留	記載なし	記載なし		
07/24	慶応3年06月13日	1867/06/13/2	遠辺		記載なし	記載なし		
07/25	慶応3年06月14日	1867/06/14	河野		記載なし	記載なし		
07/26	慶応3年06月15日	1867/06/15	坂田屋仁兵衛	深川北六軒堀下ノ棟	招請	坂田屋仁兵衛殿招請承付奉り。深川より杉村四十丁徳本屋右衛門殿招請承付奉り。		
07/27	慶応3年06月16日	1867/06/16/1	徳本彦右衛門	杉村四十丁	招請			
07/28	慶応3年06月16日	1867/06/16/2	相模屋彦平治	小石川伝通院前	記載なし	記載なし		
07/29	慶応3年06月22日	1867/06/22	朝岡屋	小石川道徳橋	記載なし	記載なし		
07/30	慶応3年06月23日	1867/06/23/1	三笠平兵衛	小石川御門内松平御殿守様御中屋敷	記載なし	記載なし		
07/31	慶応3年06月23日	1867/06/23/2	中村六之丞	小石川御門内松平御殿守様御中屋敷	招請	中村六之丞様招請承付奉り。		
07/32	慶応3年06月26日	1867/06/26	寺嶋田屋	小石川石富坂上御湯懸屋敷内	記載なし	記載なし		
07/33	慶応3年07月06日	1867/07/06	近藤善治郎	深川御竹敷和	招請	近藤善治郎様招請承付奉り。		
07/34	慶応3年07月03日	1867/07/03	横田屋之助	森塚清治	招請	横田屋様より招請承付奉り。		
07/35	慶応3年07月09日	1867/07/09	白川四郎		招請	白川四郎様招請承付奉り。		
07/36	慶応3年07月14日	1867/07/14	石丸五郎	深川森下町伊勢橋	記載なし	記載なし		
07/37	慶応3年07月16日	1867/07/16	花井	松平和泉守（三河吉屋藩主）奥女中	記載なし	記載なし		
07/38	慶応3年07月18日	1867/07/18	井見屋仁三郎	新吉原京町 江戸町2丁目湯屋	御絵伝招請	井見屋仁三郎殿御絵伝招請		
07/39	慶応3年07月20日	1867/07/20	新吉原庄兵衛・和泉屋清盛	新吉原江戸町2丁目（湯店）	招請	吉原江戸町式丁目新吉原庄三郎殿招請承付奉り。		
07/40	慶応3年07月24日	1867/07/24	石丸五郎	深川森下町伊勢橋	記載なし	記載なし		
07/41	慶応3年07月25日	1867/07/25	石丸五郎	深川森下町伊勢橋	記載なし	記載なし		
08/01A	明治01年01月23日	1868/01/23	小川文平	魚津	御絵伝招請	魚津小川文平様奉り。尤御絵伝禁断。		
08/02A	明治01年01月24日	1868/01/24	西尾三郎左衛門	魚津	御絵伝招請			
08/03A	明治01年02月24日	1868/02/24	佐藤屋	北本所馬場町	招請	佐藤屋招請承付奉り。七番強いたし。		
08/04A	明治01年02月26日	1868/02/26	井屋七左衛門	本所馬場佐藤屋	記載なし	記載なし		
08/05A	明治01年03月17日	1868/03/17	山田屋七郎	富澤橋町	御絵伝招請	山田屋七郎様奉り。御絵伝招請。		
08/06A	明治01年04月05日	1868/04/05	なまりや	富澤橋町	御絵伝招請	なまりや御絵伝招請。		
08/07A	明治01年04月20日	1868/04/20	左官喜之助	南本所石原町御殿	招請	左官喜之助殿招請承付奉り。		
08/08A	明治01年05月04日	1868/05/04	遠辺	南本所石原町御殿	御絵伝招請	遠辺様御殿者仕御湯たら等預度候事。		
08/09A	明治01年05月22日	1868/05/22	今井團書	松平和泉守（三河吉屋藩主）奥女中	御絵伝招請	今井團書様御絵伝招請承付奉り。		
08/10A	明治01年05月24日	1868/05/24	御住居様		御曼陀羅供（御曼茶羅）	御住居様御曼茶羅奉り。神前仏前拜。御曼陀羅供、夫々様御迎候事。仏法僧たど御祈申上候事。（中略）六徳源之御湯し申上候事。		
09/01B	明治01年02月04日	1868/02/04	庄崎利助	西原村	御絵伝招請強いたし	是より西原村奉り。庄崎利助殿行。尤御近以前即年二番休内や御絵伝様御強いたし御り		
09/02B	明治01年02月22日	1868/02/22	仏師屋	北本所馬場町	御絵伝	御絵伝深川仏師屋様。		
09/03B	明治01年02月24日	1868/02/24	仏師屋	北本所馬場町	御絵伝招請	是より本所馬場仏師屋二番御絵伝招請強いたし。		
09/04B	明治01年03月17日	1868/03/17	富澤橋町	富澤橋町	御絵伝招請	是より富澤橋町山田屋七郎殿。尤御絵伝様御強いたし。		
09/05B	明治01年04月09日	1868/04/09	増屋信四郎	増屋	御絵伝招請	御絵伝様御強いたし。招請、一、巻九百文、御曼陀羅供。	1頁900文	
09/06B	明治01年04月11日	1868/04/11	寺嶋田屋	小石川石富坂上御湯懸屋敷内	御絵伝招請	是より石富坂上御湯懸屋敷内。尤御絵伝招請強いたし。		
09/07B	明治01年04月19日	1868/04/19	山本元徳	深川森下町	御絵伝招請	深川森下町山本元徳様奉り。尤御絵伝招請強いたし。（以下略）。御絵伝様御強いたし。招請、一、九百拾四文、山本元徳様。	914文	
09/08B	明治01年04月20日	1868/04/20	左官喜之助	南本所石原町御殿	御絵伝招請	本所石原町左官喜之助二番奉り。尤御絵伝招請強いたし。（以下略）。御絵伝様御強いたし。招請、一、巻八百六十文、左官喜之助殿。	1頁862文	
09/09B	明治01年05月22日	1868/05/22	今井團書	松平和泉守（三河吉屋藩主）奥女中	御絵伝招請	今井團書様二番御絵伝招請強いたし。布袋や御り。		
09/10B	明治01年05月23日	1868/05/23	西原御住居		立山御絵伝御強いたし	是より西原御住居二番立山御絵伝御強いたし。		
10/01	明治26年04月18日	1893/04/18	上野太助兵衛	能登国御室郡西町村字瓜井	絵伝	瓜井村太助兵衛殿御り。絵伝、八番長谷川親善様奉り。尤。		

第2表：芦峯寺宝泉坊の蔵書目録の内容（その1）

No.	書名	冊数	写本	小本	類	入手者	図書目録	備考
001●	手鏡		文学欠損	1		(手鑑)	文学欠損不明	
002●	孔守密文 書本	1				(手本)	漢内	
003	孔子本	1				(手本)	漢内	
004	鹿詩選書記 七言絶句	5				(漢詩)	奏音	
005	灸句類聚(往來灸句類聚) 上・下	2		1		佛語	奏音	6巻/550頁
006●	仲廣入唐記(阿倍仲麻呂入唐記)	4				漢本	奏音	1巻/82頁
007●	富国書状箱(富国書状まし) 全	1		1		往來物	奏音	4巻/555頁
008	小野篁歌字尽	1		1		往來物	奏音	1巻/668頁
009●	新撰八卦 全	1				占卜	奏音	4巻/715頁
010●	善光寺如來縁起(善光寺縁起)	5				寺院	奏音	5巻/189頁
011	梵字手本	1				梵書	奏音	7巻/380頁
012	泉州信田白狐伝(信田白狐伝)	5				漢本	奏音	5巻/198頁・4巻/161頁
013	四季名寄	1		1		佛語	奏音	4巻/37頁
014	道歌本	1		1		(道歌)	奏音	
015	諸家法活花道 全	1		1		花道	奏音	4巻/522頁
016	ちんかう記	1		1		和算	奏音	4巻/661頁
017	流道中記	1		1	小本	地誌	奏音	4巻/556頁
018	道成寺霊験記	6				寺院	奏音	6巻/64頁
019	集葉手本	1				(手本)	奏音	
020●	生花早菘茶本 三編全	3				花道	奏音	1巻/163頁
021	小倉百人一首	1		1		書道or繪本or和歌	奏音	1巻/635頁
022	神櫻 二編	1		1		佛語	奏音	2巻/781頁
023●	例時備法	1				声明	奏音	8巻/128頁
024	法華經 一部	1		1		(仏教)	奏音	
025	因果経抄(善悪因果経抄)	5 (1冊に合本)				仏教	奏音	5巻/176頁
026	延命地蔵経	1				梵書	奏音	1巻/534頁
027●	思心僧都御法説(思心僧都法説)	1				天台	奏音	1巻/449頁
028	法道字引 全	1		1		辞書	奏音	6巻/50頁
029●	新童子撰茶万家通 全	1				往來物	奏音	4巻/742頁
030	茶談新童子通 全	1				雑書	奏音	4巻/124頁
031●	十王讃嘆抄 上・下二冊合本	2 (1冊に合本)				仏教or日蓮	奏音	4巻/238頁
032	法華経(空海宗廟本) 一部	1				(仏教)	奏音	
033	当山三途之大縁起(嘉永二酉初冬)	1		1		(仏教) (立山大縁起)	奏音	
034	三杯千字文(米庵先生書(市河米庵))	1				(手鑑)	奏音	
035●	書画本西遊全伝 一編 二編	不明				漢本	奏音	備考：松平春信の天保6年完結の戯作。説本『西本西遊全伝』4編40冊。西遊記の邦訳。
036●	首原(家)実録 六ヨリ廿五	16	1			伝記	奏音	2巻/295頁
037	前太平記 一ヨリ廿五、内四・七ヌケ	18	1			戦記	奏音	5巻/212頁
038●	顔光一代記(顔光一代記か?) 一ヨリ十巻	10	1			実録	奏音	8巻/4頁
039	忠義太平記(忠義太平記大全)	5				浮世草子	奏音	5巻/653頁
040	権座	3				不明	奏音	不明
041	すいの道行(鈴のみつすれ)	2		1		唯本	奏音	5巻/177頁・唯本
042●	盛衰記(源平盛衰記) 十九ヨリ四十八巻	15				軍記物語	奏音	3巻/160頁
043●	太閤良縁記(良書太閤記) 五編十七ヨリ二十式マテ	1		1		実録	奏音	5巻/385頁・4巻/704頁
044	新増字林玉篇大全 全	1				辞書	奏音	4巻/718頁・719頁
045●	宝財雑書万々載 全	1				歴	奏音	7巻/297頁
046	百座図録	1合本(3冊)				仏教	奏音	6巻/806頁
047●	佐世の中山物語(佐世の中山夢物語)	1		1		物語	奏音	3巻/745頁
048	広三大家絶句 一冊	1				(啓書書)	奏音	大江詩仙(漢詩人)。文化9年。啓書書
049●	間路製紙松	2				心字	奏音	7巻/818頁
050●	見聞独歩行	2				仏教・教訓	奏音	3巻/171頁
051	大令早引節用要	1				辞書	奏音	5巻/164頁・節用要
052	歌道園百絶(東園百絶)	1				漢詩	奏音	6巻/8頁
053●	古文算草	2				漢詩	奏音	3巻/547頁
054●	大岡仁政録	10				実録	奏音	1巻/573頁
055●	科注思重経抄序(科注父母思重経図撰巻)	1				真言	奏音	2巻/166頁
056●	無量寿経総科	3				仏教	奏音	7巻/651頁
057★	大宇西谷名目(西谷名目)	2				天台	奏音	6巻/330頁
058	天台円宗四教本末・五時律金等名目表ノ本末	4				天台	奏音	
059	十葉手鏡 全	1				真言	奏音	4巻/291頁
060●★	科注無量寿経等(科注仏説観無量寿経)	10				仏教	奏音	2巻/166頁
061●	大令消息往來	1		1		往來物	奏音	5巻/432頁
062●★	玉翰七尋文集	1				不明	奏音	不明
063	四声字引	1		1		辞書	奏音	四声玉篇字引大全4巻/91頁・辞書
064	大日本年鑑	1		1		年表	奏音	5巻/465頁

第2表：芦峯寺宝泉坊の蔵書目録の内容（その2）

No.	書名	冊数	写本	小本	種	入手者	図書総目録	備考
065●★	討論碑金幼学後覽	1			漢詩	奏音	7巻/874頁	現所蔵本に「立山宝泉坊奏音代末」とある。
066	浄土和讃同観 全	1		1	仏教	奏音	4巻/475頁	
067●★	止観大意講録 全	1			天台	奏音	4巻/26頁	現所蔵本に「安政六己未三月、宝泉現任奏音求之」とある。
068●	古今和歌集 上・下	2			歌集	奏音	3巻/365頁	
069●	教誨律儀（教誨律儀簡訳）	1			仏教	奏音	2巻/486頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申肥前平戸新田城主松浦棟内寿信法尼到拙僧江遺物之内。立山戸峯寺宝泉坊六十二世奏音。」とある。
070●	五部丸巻要文・二蔵二教略頌	1合巻			浄土	奏音		万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申年、肥前平戸新田城主松浦豊後守殿内寿信尼到遺物ノ内。立山戸峯寺宝泉坊奏音代。」とある。
071●	高僧大師真蹟書	1			書蹟	奏音	3巻/313頁	
072●	放生報恩集	1			浄土	奏音	7巻/273頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申本所松浦大和守棟内寿信尼ヨリ拙僧江遺物之内。立山戸峯寺宝泉坊奏音代。」とある。
073●	釈教論	1			浄土	奏音	4巻/219頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元申星、立山戸峯寺宝泉坊奏音、寿信尼ヨリ遺物ノ内。」とある。
074●	勸善録	1			浄土	奏音	2巻/338頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申星、立山宝泉坊奏音代、復節佐伯左内政、本所松浦大和守棟ノ内寿信尼ヨリ遺物之内。」とある。
075	九悲詩 書本	1			漢詩	奏音	2巻/661頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
076	無能和尚勸心録	1			(仏教)	奏音	無能和尚勸心録歌集・無能和尚行業遺事7巻/639頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
077	念仏草紙 上	1			板名草子	奏音	6巻/458頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
078	水鏡注目無草 下	1			臨濟	奏音	7巻/528頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
079	茶店問答 書本	1			真宗	奏音	5巻/647頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
080●	唯信抄	1			真宗	奏音	7巻/828頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
081	妙祐往生伝	1			伝記	奏音	7巻/600頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。
082●	随聞往生記 上・中・下	3			伝記	奏音	5巻/21頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本の upper 巻に「万延元庚申星、立山戸峯寺宝泉坊奏音代、松浦大和守御内寿信尼ヨリ遺物也。」とある。
083●	菩薩三聚戒（菩薩三聚戒辨要）	1			浄土	奏音	7巻/325頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申仲冬立山戸峯寺宝泉坊奏音代」とある。
084●	九品山略縁起	1			(仏教)	奏音	九品山略縁起2巻/677頁・寺院	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申仲夏立山戸峯寺宝泉坊」とある。
085●	持律機籠 全	1			仏教	奏音	4巻/620頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。現所蔵本に「万延元庚申年立山宝泉坊奏音代末」とある。
086	小夜中山宮録記	5			仏教	奏音	3巻/745頁	万延元年、寿信尼ヨリ遺物ノ内。